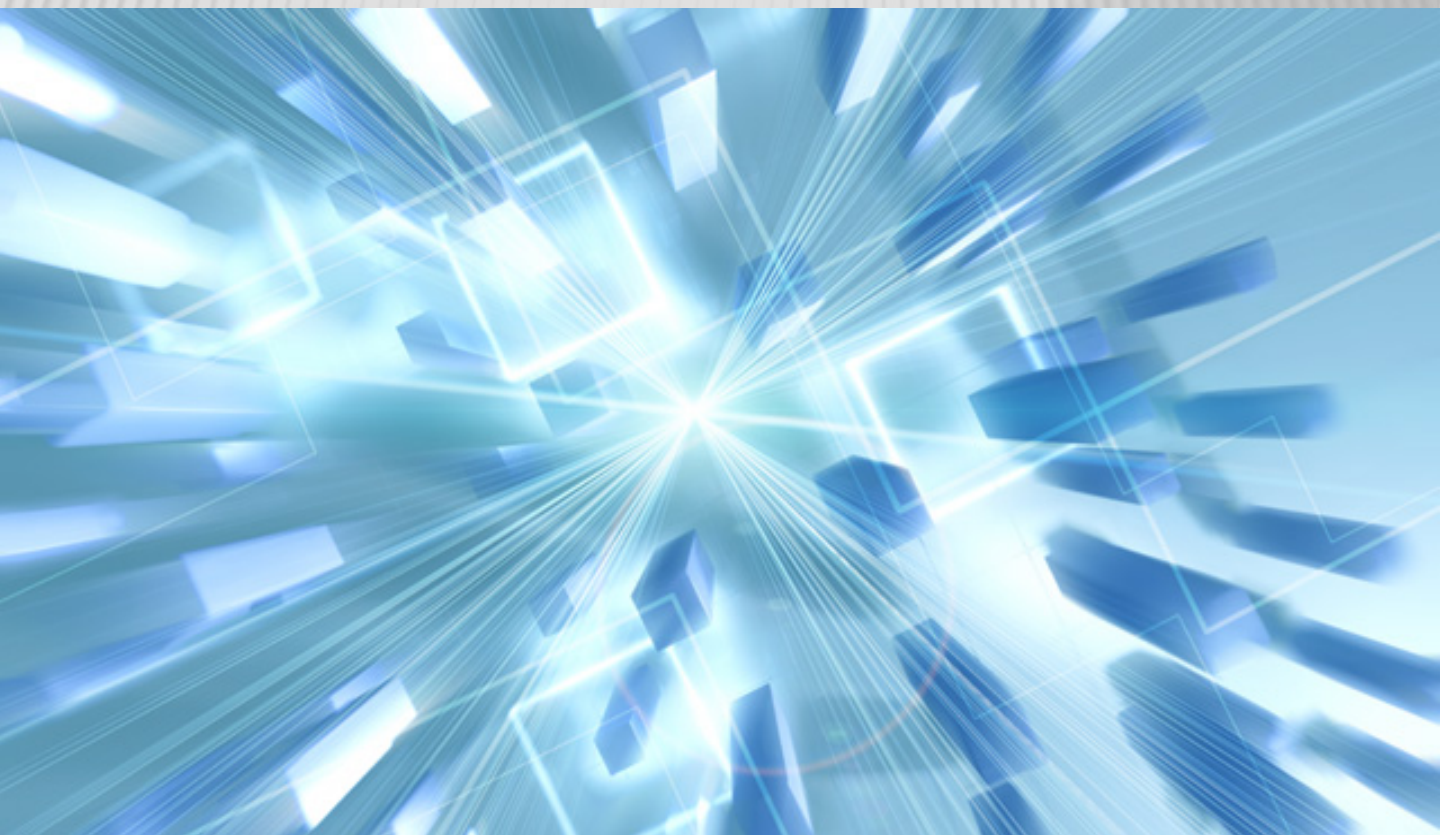


# 『留学交流』

## 2016年 8月号

特集

海外留学することの意義



JASSO

独立行政法人

日本学生支援機構

Japan Student Services Organization

特集 海外留学することの意義

【論考】	1
留学体験のインパクトと成果 -留学経験者と留学非経験者の比較調査から- Impact and Results of Study Abroad: Japanese who studied abroad compared with those who did not 明治大学国際日本学部准教授 小林 明 KOBAYASHI Akira (School of Global Japanese Studies, Meiji University)	
【事例紹介】	16
短期海外語学研修はどれほどの効果があるのか -常磐大学の場合- How Effective is a Short-Term Study Abroad Program?: A Case of Tokiwa University いわき明星大学 大津 理香 常磐大学 佐竹 正夫 OTSU Rika (Iwaki Meisei University) SATAKE Masao (Tokiwa University)	
【事例紹介】	25
海外体験学習におけるルーブリックの活用 -タイ・スタディツアーにおける学びの評価- Application of Rubrics in Oversea Educational Tourism: An Assessment of Learning in Study Trip in Thailand 同志社女子大学現代社会学部教授 藤原 孝章 FUJIWARA Takaaki (Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts)	
【事例紹介】	31
海外留学への期待 -立教大学の国際化推進事例から- Expectations of Study Abroad: Global Initiatives of Rikkyo University 立教大学副総長 山口 和範 YAMAGUCHI Kazunori (Vice-President, Rikkyo University)	
【海外の教育事情】	37
中国の高校生にとっての海外留学 -高級中学国際部の教育課程に焦点を当てて- Study Abroad for High School Students in China: Focus on International Divisions of Senior High Schools 大阪樟蔭女子大学学芸学部 小野寺 香 ONODERA Kaori (Faculty of Liberal Arts, Osaka Shoin Women's University)	
【海外留学レポート】	42
ミャンマーの病院でのインターンシップ -現地で学んだ国際協力に大切な心- Internship Activity at Hospital in Myanmar: The Lesson I Learned; Important Mind for International Cooperation 佐賀大学経済学部 山口 諒真 YAMAGUCHI Ryoma (Faculty of Economics, Department of Economics, Saga University)	

# 留学体験のインパクトと成果

—留学経験者と留学非経験者の比較調査から—

## Impact and Results of Study Abroad:

Japanese who studied abroad compared with those who did not

明治大学国際日本学部准教授 小林 明

KOBAYASHI Akira

(School of Global Japanese Studies, Meiji University)

キーワード：海外留学、留学経験、留学インパクト、グローバル人材

### はじめに

海外留学の体験とその意義や成果、効果については国内外でさまざまに論じられてきた。特に今世紀に入った一時期日本人の海外留学者数の減少がマスコミで騒がれ、グローバル化に対応せざるを得ない経済界は、世界の舞台で活躍できる有能な人材を求める傾向を示し、政府もそうした動向にこたえる形で教育及び社会の国際化に向けて、日本人の海外留学を支援する政策<sup>1</sup>を次々と打ち出してきた。

筆者も海外留学を推進する立場から、現場でプログラムの企画、実施、管理に携わる傍ら、2011年の『留学交流』(vol. 2)で日本人学生の海外留学阻害要因と対策<sup>2</sup>について、2013年の『留学交流』(vol. 29)では留学が社会人参加者に与えた影響<sup>3</sup>について、そして2015年の『留学交流』(vol. 53)では、筆者も参加した科研「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する国際比較研究」<sup>4</sup>の調査結果と2013年の調査研究との比較分析を行い、留学のインパクトが留学後の時間経過によっ

<sup>1</sup> 大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業(G30)(2009-2014)、グローバル人材育成推進事業(2012-2016)、大学の世界展開力強化事業(2011-)、スーパーグローバル大学創成支援事業(2014-2023)など文部科学省の補助金による推進事業。

<sup>2</sup> JASSO ウェブマガジン『留学交流』2011年5月号 Vol. 2を参照のこと。

<sup>3</sup> JASSO ウェブマガジン『留学交流』2013年8月号 Vol. 29を参照のこと。

<sup>4</sup> 「グローバル人材育成と留学の長期的インパクトに関する国際比較研究」平成25～27年度文部科学省科学研究費助成事業基盤研究A(研究代表者 横田雅弘)

ておこる変化<sup>5</sup>について発表した。

本稿では、上記の科研の報告として発行されたサマリーレポート『グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査』(2016)を基に、これまで発表されてきた新見・太田・渡部・秋庭(2016)、米澤・新見(2016)の発表内容を参考にまとめてみた。特に、留学経験者に対する留学非経験者を比較することで留学体験のインパクトをより客観的な視点で捉えることを試みている。

## 1. 調査の概要

### 1. 調査の目的

今回の調査は、留学が人生においてどのようなインパクトをもたらしたかに関する長期的な影響を把握するために実施されたものである。

### 2. 調査方法・対象

今回の調査は、2015年8月～9月にかけて調査関係者による依頼ならびに調査会社により行ったインターネット調査である。

調査対象者の留学経験者とは、「義務教育は主に日本で受け、日本の高校卒業後に3か月以上の海外留学を経験した人で、留学機関は、高校、大学、大学院、職業・専門学校、語学学校に限定し、ボランティアやワーキングホリデーは含んでいない。」こととした。

留学非経験者は、「国内の大学卒もしくは大学院卒業者。日本にある企業に勤めている人か主婦あるいは無職の人で、3か月以上の海外留学や海外在住経験がなく、帰国子女でない人。さらに大学入学前にインターナショナルスクールに通っていたり、家庭内で外国語を使用していなかったりなど外国語運用力をつけていなかった人」とした。

### 3. 回答者の属性

今回の回答者の属性を留学経験者と留学非経験者の比較で見ると、有効回答4,489名の留学経験者と比較グループとしての留学非経験者1,298名で、詳細は次の表1のようになっている。年代では、40歳代と30歳代がそれぞれ30%以上で70%弱と高い構成率であるが、50歳代も約20%、20歳代以下も10%強と経験者・非経験者ともにほぼ同様の割合を示している。

性別では男女ほぼ50%である。留学時の学校種別で比較すると、留学経験者には高校3.2%、語学学校31%、その他7%の合計41.2%が含まれるので、留学非経験者と比較するためにそれらを除いたものを示しているが、留学経験者の大学比率が約20%高くなっている。

<sup>5</sup> JASSO ウェブマガジン『留学交流』2015年8月号 Vol. 53 を参照のこと。

表1 回答者の属性

	年代	
	留学経験者	留学非経験者
50歳代以上	20.2	17.0
40歳代	35.2	34.7
30歳代	31.5	33.7
20歳代以下	13.0	14.6
	性別	
	留学経験者	留学非経験者
女性	50.9	50.2
男性	49.1	49.9
	教育レベル	
	留学経験者*	留学非経験者
大学	70.8	54.7
大学院修士	21.5	35.5
大学院博士	7.7	9.8

\*高校、語学学校、その他の学校種別を除いた割合

#### 4. 調査項目

調査項目の領域は「価値観の醸成」「能力の向上」「年収と役職」「キャリアへの影響」「授業や課外活動に対する積極性」「人生や仕事の満足度」「行動の変化」を設定した。今回の調査の主目的である留学経験者と留学非経験者の比較を行うために、内容的には齟齬のない質問設定を試みたが、留学経験者には海外留学の経験に関連付けた質問とし、留学非経験者に対しては、国内の大学・大学院での経験や向上した能力、卒業（修了）後のキャリアといった視点からの質問に置き換えた。

### II. 調査結果と考察

#### 1. 価値観の醸成

海外留学の結果（留学非経験者には、【大学・大学院の卒業（修了）の結果】）、次のような意識がどの程度高まったと思うかという質問に対して、図1及び図2に示す結果が得られた。表の色分けでみると赤色で示している「つよくそう思う」とオレンジ色の「そう思う」を留学経験者と非経験者と比較すると前者の占める割合が相当大きいことが分かる。具体的にみると両グループ間の顕著な差は、留学経験者と留学非経験者の全体的な意識変化をみればより明確であり、①国家・地域・地球に関する帰属感、②平和や外交、宗教、地球的な課題への関心などグローバル社会への関心、そして③自己効力感や自己肯定感といった自分自身の変化の3領域16項目いずれにおいても留学経験者が2倍から4倍もの肯定的な意識の変化を認識している。

図1 留学による価値観の醸成（留学経験者 4,489人）

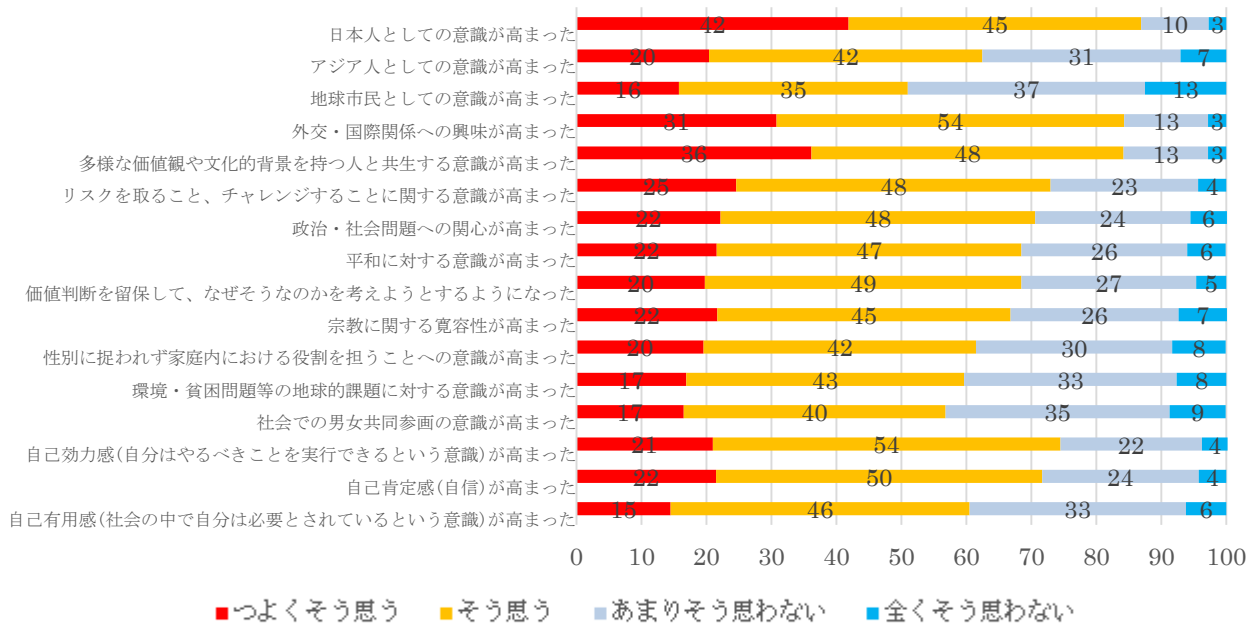
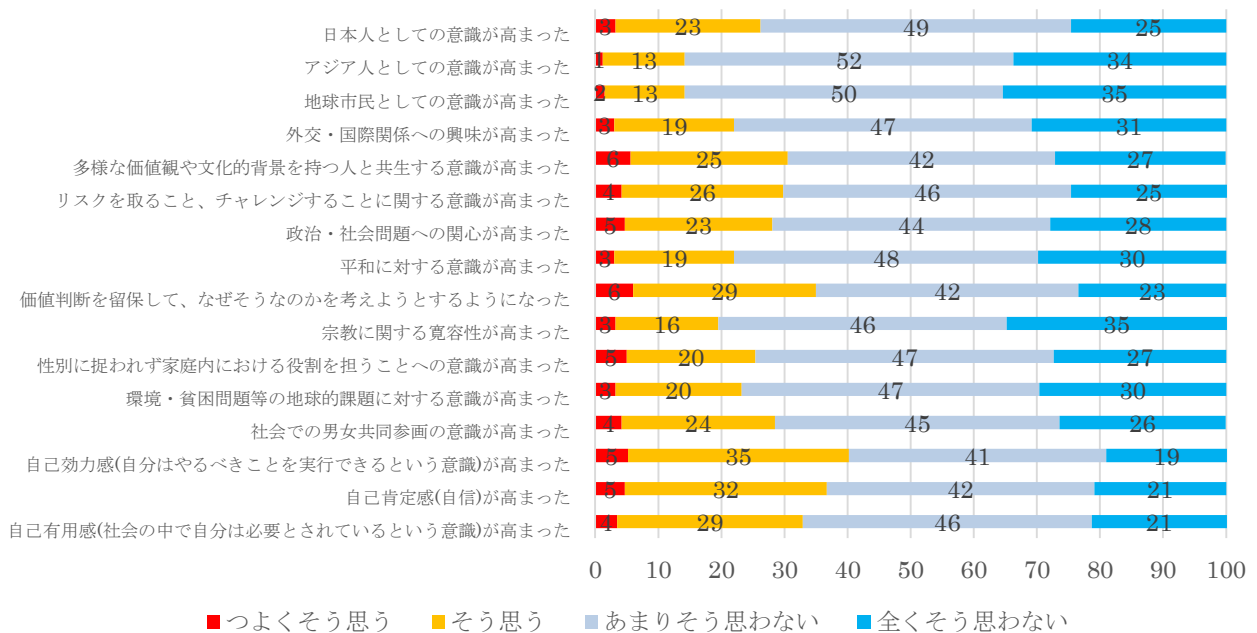


図2 留学による価値観の醸成（留学非経験者 1,298人）



3つの領域別にみると、グローバル人材の認識として重要である①国家・地域・地球に関する帰属感については、「アジア人としての意識」（留学経験者 63%、留学非経験者 14%：以下留学経験者と留学非経験者の数字をこの順で記載する）や「地球市民としての意識」（51%、14%）の醸成がみられ、留学経験者は留学非経験者に比べてそれぞれ 4.4 倍、3.6 倍と全項目中 1 番目と 3 番目の大きな差を示した。「日本人としての意識」は、「つよくそう思う」（42%、3%）、「そう思う」（45%、23%）となり、両者を合わせると留学経験者 87%、非経験者 26%であり、これも大きな差を示している。留学

により異文化との接触や異文化を背景とする人々との交流によって、自分自身の帰属やアイデンティティについて考えさせられた結果の反映であると推察できる。海外留学が個人にもたらす重要な変化を示しているといえよう。

次に大きな変化がみられるのは、②平和や外交、宗教、地球的な課題への関心などグローバル社会への関心についての項目である。特に「外交・国際関係への興味」(84%、22%)は3.8倍の違いがあり、全項目中2番目の大きな差を示した。同じく高い変化を認識した項目は、「多様な価値観や文化的背景を持つ人と共生する意識」(84%)、「リスクを取ることに、チャレンジすることに関する意識」(73%)、「政治・社会問題への関心」(71%)と続き、いずれも非経験者の意識変化と比較すると2.8倍から2.4倍という高い数値を示した。10項目中60%に届かなかったのは唯一「社会での男女共同参画の意識」(留学経験者で57%)だったが、非経験者との比較では2倍の意識の高まりを示している。

自己効力感や自己肯定感といった自分自身の評価に関する質問についてみると、「自己効力感(自分はやるべきことを実行できるという意識)」が(75%、40%)、「自己肯定感(自信)」が(72%、37%)、「自己有用感(社会の中で自分は必要とされているという意識)」(61%、33%)で、留学経験者が約2倍となった。

以上のことから海外留学の経験は、留学を経験しなかった者と比較して、より前向きで肯定的な価値観の醸成につながっているといえるのではないだろうか。

## 2. 能力の向上

18項目の能力の向上については図3と図4の比較で明らかなように留学経験者はほぼ全項目において平均80%に近い高い割合で能力の向上を認識しており、留学非経験者の50%と比べるとその違いが明確である。特に「留学先の文化社会に関する知識」、「外国語運用能力」、「異文化に対応する力」の3点において差が大きい。

能力の向上に関する差が10%未満であったものは3項目で、専門知識・技能(74%、73%)、論理的思考力(68%、60%)、協調性(74%、63%)であった。それ以外の能力の向上に対する認知は20%から40%近い差がみられた。

留学経験者のこれら能力の向上は、留学期間中の多様な外国人とのコミュニケーションや外国語による授業や多文化社会での生活などを通じた体験を通して獲得したことを示唆していると言えるのではないか。

図3 能力の向上(留学経験者)

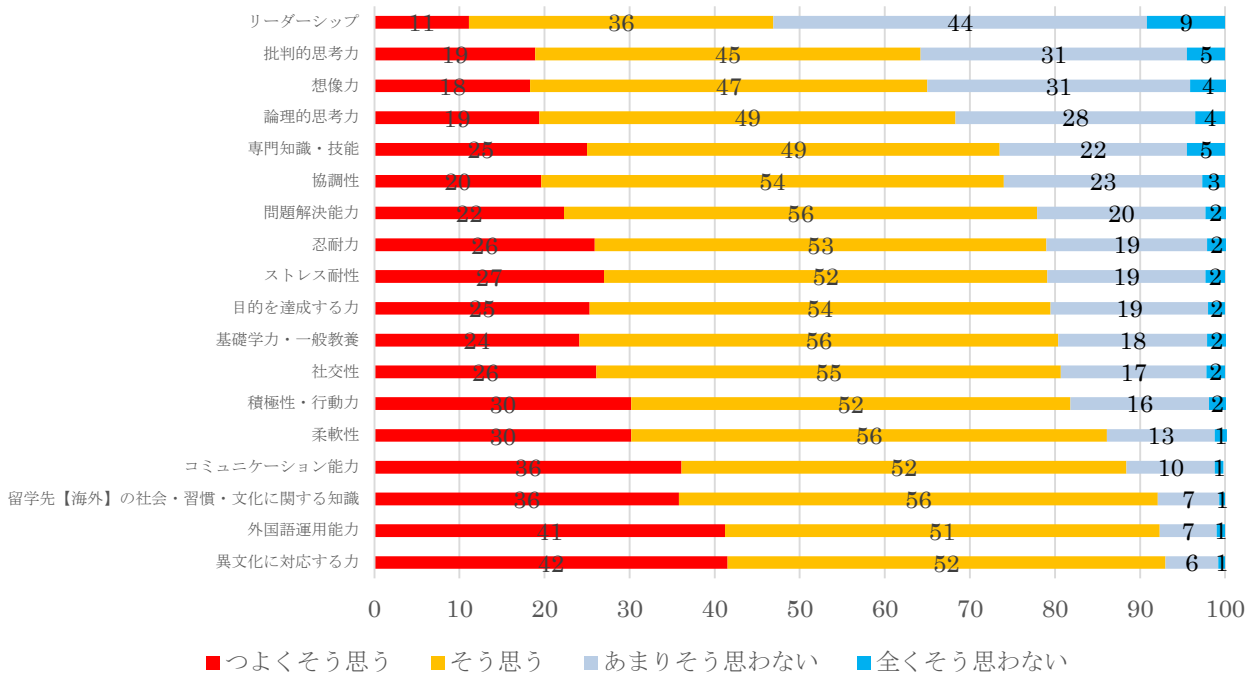
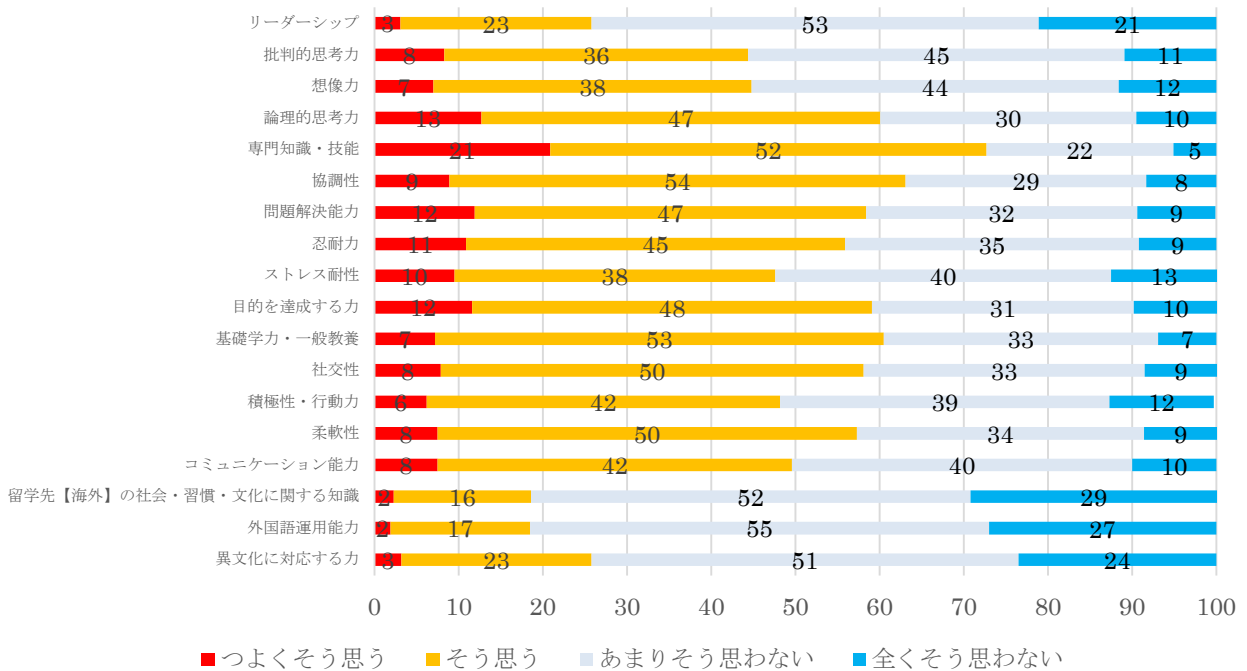


図4 能力の向上(留学非経験者)



以上のことから、留学経験者と留学非経験者とでは、2011年にグローバル人材育成推進会議により中間報告として発表された「グローバル人材」の定義にある要素Ⅰ～Ⅲ（図5）や能力水準など自己評価における達成感に大きな差が認められることが分かる。



図5 グローバル人材の定義  
グローバル人材育成推進会議資料2から引用

○「グローバル人材」の概念を整理すると、概ね、以下のような要素。  
 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力  
 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感  
 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

○このほか、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等。

○グローバル人材の能力水準の目安を(初歩から上級まで)段階別に示すと、  
 ① 海外旅行会話レベル ② 日常生活会話レベル ③ 業務上の文書・会話レベル  
 ④ 二者間折衝・交渉レベル ⑤ 多数者間折衝・交渉レベル

この中で、①②③レベルのグローバル人材の裾野の拡大については着実に進捗。今後は更に、④⑤レベルの人材が継続的に育成され、一定数の「人材層」として確保されることが極めて重要。

(出典)「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」(2011年6月) グローバル人材育成推進会議3

### 3 キャリアへの影響

#### 3-1 就職活動への影響

以下の図6と図7で明らかのように、留学経験者は採用において留学経験が肯定的に作用したと認識しているのに対して、留学非経験者は大学・大学院での経験をあまり評価されたと認識していない。

留学経歴／国内大学卒業・大学院修了(56.1%、46.3%)、語学力(56%、7.1%)、知識・スキル(53.2%、41.7%)、外国人とのコミュニケーション経験(55.6%、6.2%)となり、留学経験者が高いのは当然とは言え、国内の大学・大学院での教育では、外国語や外国人とのコミュニケーションの力を採用側に評価されることはほとんどないと感じていることがわかる。

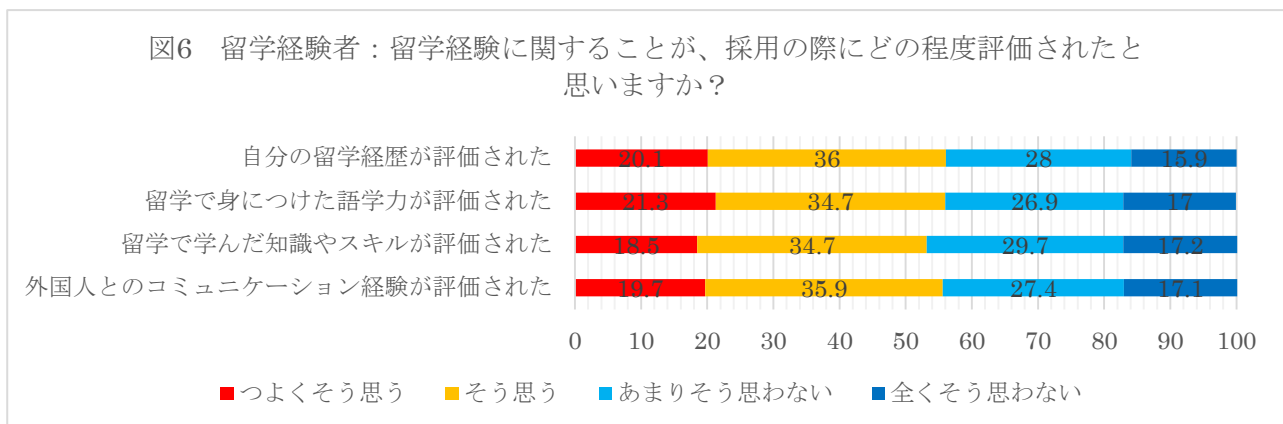
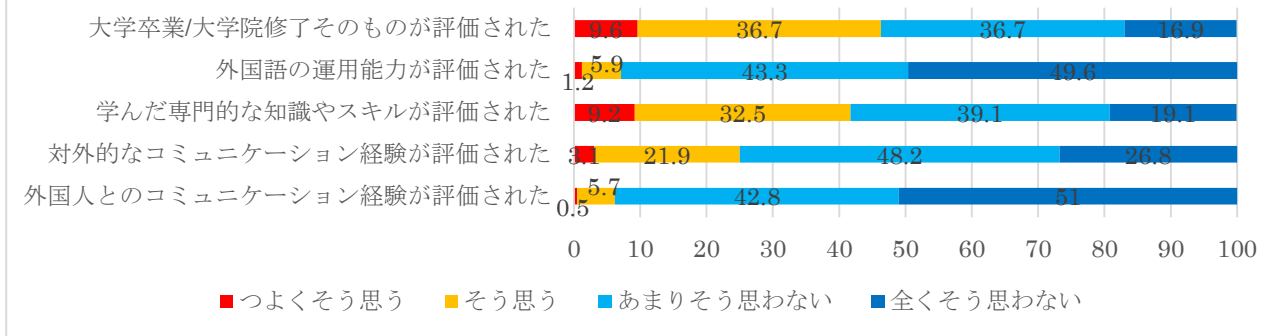


図7 留学非経験者：大学・大学院での経験に関することが、採用の際にどの程度評価されたと思いますか？



「留学経歴/大学卒業・大学院修了そのものが評価された」と認識している者について、学校種別の集計で留学経験者の順位をもとにもう少し詳しくみてみると、文科系修士・博士（82.2%、41.4%）、学士女性（72.8%、46%）、理工系修士・博士（70.9%、69.4%）、学士男性（66.4%、37.7%）となっており、経験者と非経験者の間には理工系修士・博士を除き、ほぼ20～30ポイントの開きがある。

「留学/国内大学・大学院で学んだ専門的な知識やスキルが評価された」と認識している者について留学経験を基準として評価順に並べると、文科系修士・博士（84.2%、58.7%）、理工系修士・博士（76.4%、52.5%）、学士男性（70.6%、29.7%）、学士女性（66.7%、30.3%）の順になり、「国内の大学卒業・大学院修了そのものが評価された」と認識している者の順位は、先の「留学経歴/大学卒業・大学院修了に対する評価」とは多少前後するものの評価比率はほぼ同様の結果を示している。

留学経験者と留学非経験者の評価に大きな差を示した「留学で身につけた語学力/外国語運用能力が評価された」と認識している者については、文科系修士・博士（79.2%、9.2%）、学士女性（73.7%、5.1%）、学士男性（68.7%、5.7%）、理工系修士・博士（63.6%、8.8%）となり、留学経験者が70から55ポイントも高くなっている。

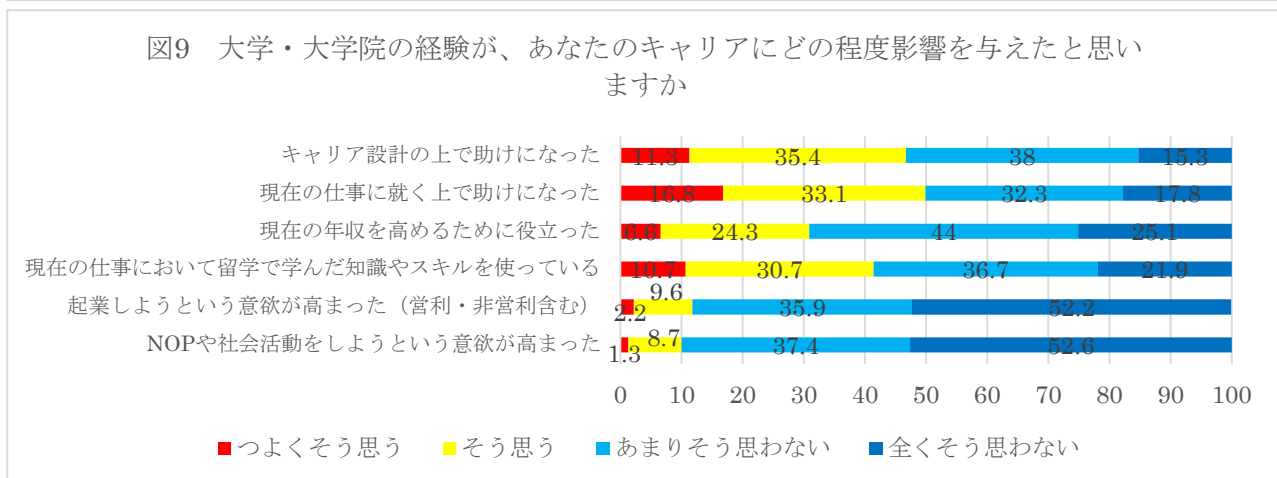
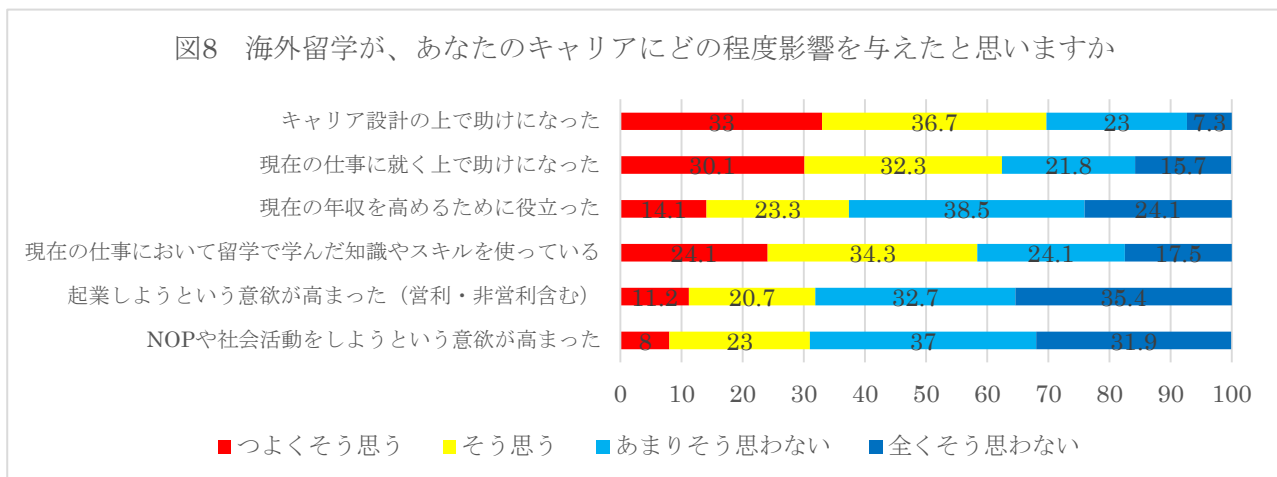
「外国人とのコミュニケーション経験が評価された」についても、文科系修士・博士（76.8%、8.2%）、学士女性（69.7%、3.4%）、学士男性（65.4%、6.3%）、理工系修士・博士（63.6%、8.1%）と留学経験者と留学非経験者にそれぞれ60ポイント前後の大きな差がみられた。

以上のことから、グローバル人材育成の要素Ⅰとして指摘されているコミュニケーション能力や外国語能力などについては、上記Ⅱの2で明らかなように留学経験者は18項目の能力中ほぼ全項目で80%近い高い割合で能力向上を自覚しており、採用側にも評価されていると認識していることが分かる。他方、国内大学卒業・大学院修了者が採用にあたってそれらの点では殆ど評価されていないと認識している。留学非経験者の国内の大学や大学院での経歴および学んだ専門知識やスキルについては、採用時に一定程度の肯定的な評価を受けたと認識しているようであるが、留学経験者と比較すると10ポイント程度劣っており、留学経験者がより大きな影響を受けていることを示唆している。

## 3-2 キャリア設計への影響

就職活動への影響については図8と図9が示す通り、留学経験者と留学非経験者との間には明確な違いが見られた。キャリアへの影響について両者を比較すると、キャリア設計（69.7%、46.7%）、現在の仕事への就職（62.4%、49.9%）、学んだ知識やスキルの使用（58.4%、41.4%）においては留学経験者がいずれも60%前後の評価を示しているが、留学非経験者は50%に届いていない。現在の年収を高めること（37.4%、30.9%）については、米澤・新見(2016)にもあるように留学経験が影響を及ぼすほどの効果を見出しにくい状況のようである。

双方とも30%程度と比較的低い評価の年収は別として、留学経験者の約70%が留学をキャリア設計への影響、約60%が現在の仕事への就職と就職後の仕事で学んだ知識やスキルが役立っていると高く評価している。留学非経験者はいずれの評価についても留学経験者と同様の傾向がみられるが、留学経験者よりも20%から6.5%下回っている。留学非経験者が約10%と影響を低く評価している起業やNPOなど社会活動への意欲については、留学経験者はいずれも30%強と20ポイント程度高く評価していることからキャリア設計から就職活動においては一定程度的影響があると認識していると考えられる。



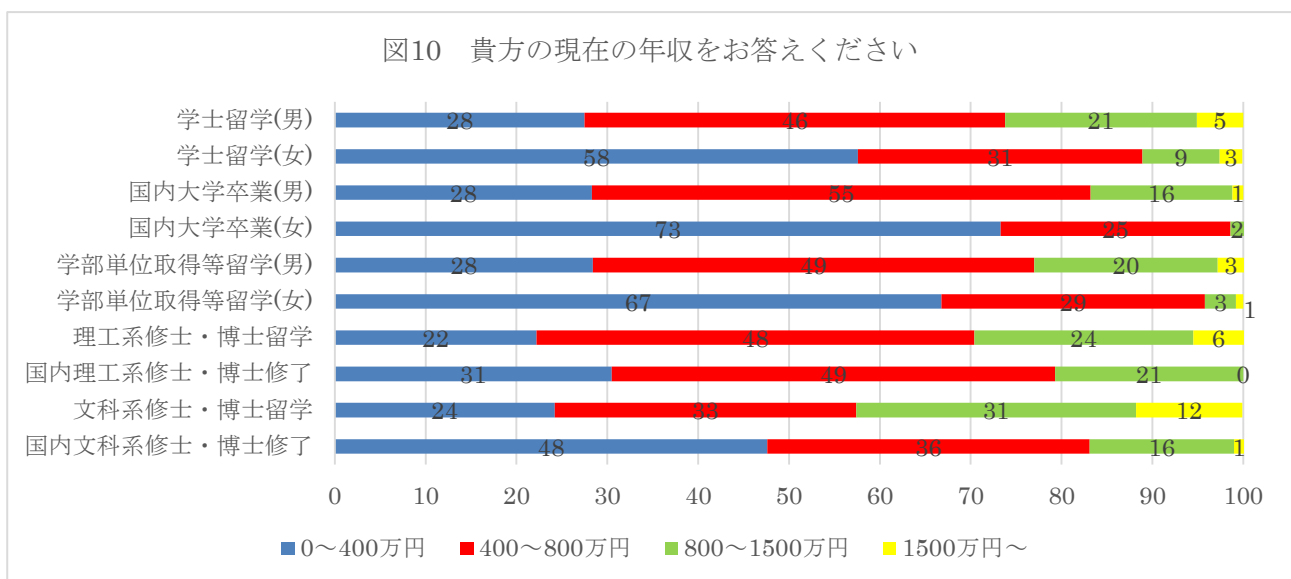
大学・大学院に限って学校種別にみると、大きな差がみられる。特に「キャリア設計の上で助けになった」とする文科系修士・博士留学（92.6%、59.6%）、学士留学男性（80.8%、35.9%）、学士

留学女性（80.3%、36.7%）、理工系修士・博士留学（80%、59.4%）と留学経験者はいずれも80%以上で留学非経験者よりも45から20ポイント高い評価がみとめられた。「現在の仕事に就く上で助けになった」と「現在の仕事において留学/大学・大学院で学んだ知識やスキルを使っている」という項目でもほぼ同様の比率を示したが、「現在の年収を高めるのに役立った」では、留学経験者と留学非経験者ともに全体の傾向は類似しているものの、「つよくそう思う」「そう思う」の合計は、上記2項目と比べて留学経験者が40%～50%、留学非経験者も15～20%低い数値となっている。

### 3-3 年収

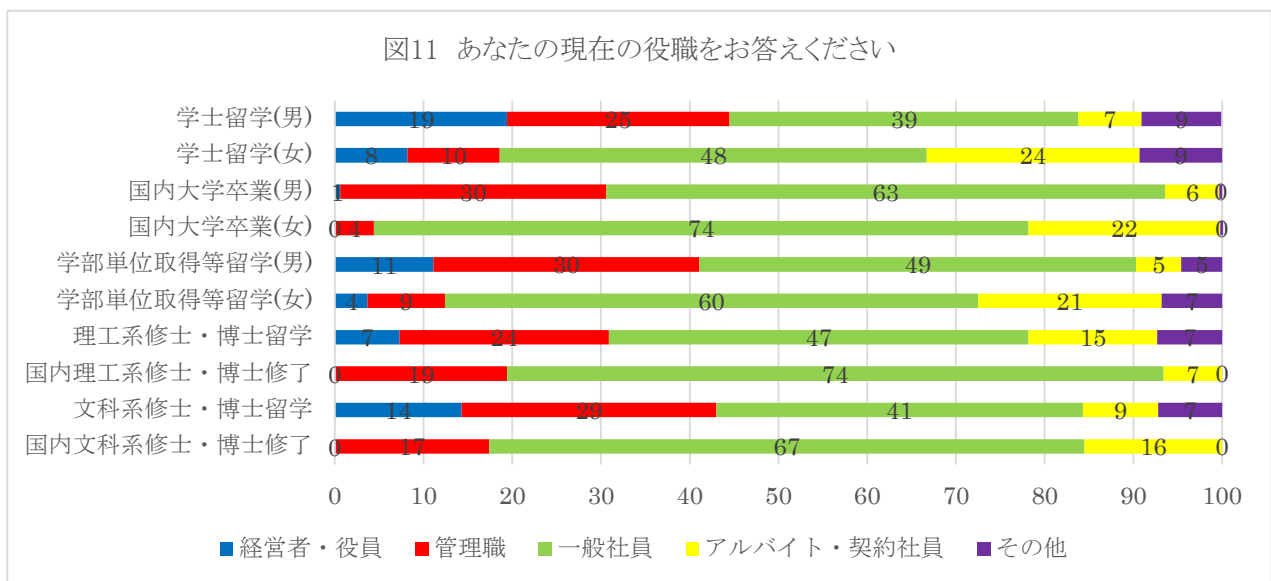
留学経験者と留学非経験者との年収の違いは、高額所得者の割合が留学経験者に高いことである(図10)。年収800万円以上をみると文科系修士・博士留学(43%、17%)、理工系修士・博士留学(30%、21%)、学士留学男性(26%、17%)、学士留学女性(11%、2%)の順になっている。大学院留学経験者の年収は、年齢層が比較的高いということと文科系修士留学にはMBAが少なからず含まれていることは考慮すべきだが、文系・理工系を問わず800万円以上がそれぞれ40、30%と高くなっており、国内就学グループに1500万円以上が殆どみられないことから、留学経験が年収に結びついているといえるのではないだろうか。

もう一つ明確なことは、男女の差である。男性は、学士留学、学部単位取得等留学ともに800万円を超える年収が20%半ばであり、国内の大学院修了者の20%をも上回っている。男女で比較すると確かに女性の年収は学士留学、学部単位取得留学、国内大学卒業の如何を問わず相対的に大変低い。800万円以上に限定すると学士留学女性(12%)に対して国内大学卒業女性(2%)と留学した女性の方が10ポイント高く、米澤・新見(2016)が指摘するように年収を高める効果はみとめられるが、男女の年収の差まで解消するほどの影響はない。



## 3-4 役職

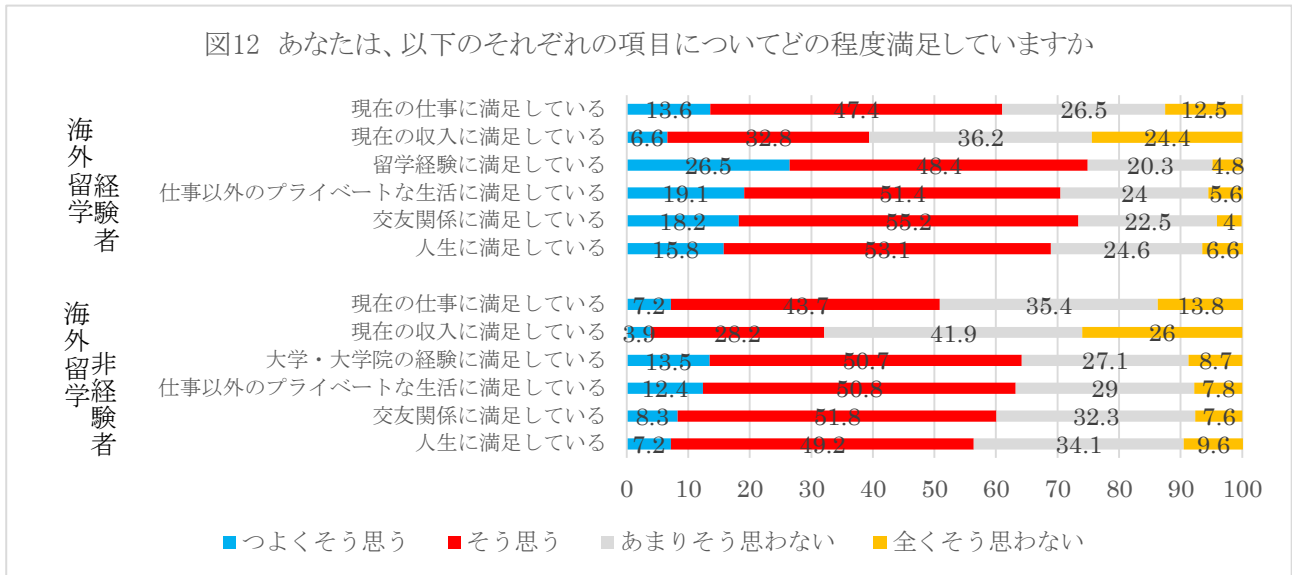
役職については、より多くの留学経験者が高い地位についている結果（図11）を示した。経営者・役職者に管理職を加えると、学士男性(44.5%、30.6%)、文科系修士・博士(43%、17.4%)、理工系修士・博士(30.9%、19.4%)、学士女性(18.6%、4.4%)で、米澤・新見(2016)にあるように留学経験者の役職についている比率が高いことが分かる。経営者・役員に限定すると学士男性(19%、0.6%)、文科系修士・博士(14.3%、0%)、学士女性(8.2%、0%)、理工系修士・博士(7.3%、0%)と、いずれの学校種別でも留学経験者が高い。留学グループでは一番少ない学士留学女性(18.6%)でも管理職で比較すると、国内理工系修士・博士(19.4%)、国内文科系修士・博士(17.4%)とほぼ同じ比率であることから、留学がキャリアへ大きく影響していると言えるのではないだろうか。



## 4. 人生や仕事の満足度

図12に示している通り、留学経験者が70%前後、留学非経験者が60%前後と双方とも比較的高い満足度を示しており、際立って大きな差が見られない。交友関係に対する満足度(73.4%、60.1%)、仕事以外のプライベートな生活に対する満足度(70.5%、63.2%)、人生に対する満足度(68.9%、56.4%)、現在の仕事に対する満足度(61%、50.9%)、現在の収入に対する満足度(39.4%、32.1%)といずれも10ポイント未満の差であり、その差はほぼいずれの項目でも「つよく思う」割合において、留学経験者が約10%高いことがそのまま反映されている。現在の収入に対する満足度はいずれも30%台と低い、それ以外の項目では留学経験者が70%前後、留学非経験者が60%前後の比較的高い満足度を示している。

図12 あなたは、以下のそれぞれの項目についてどの程度満足していますか



## 5. 留学による行動の変化

海外留学の結果、【留学非経験者には、大学・大学院の卒業(修了)の結果、】以下7つの行動への関わりがどの程度多くなったと思うかという質問に対する回答である。高校留学、学士留学、学部単位取得等留学、文科系と理工系の大学院修士・博士の留学経験者に対して、国内大学卒業・大学院修了グループの回答と比較したものである。

〈地域などへの貢献・支援活動〉

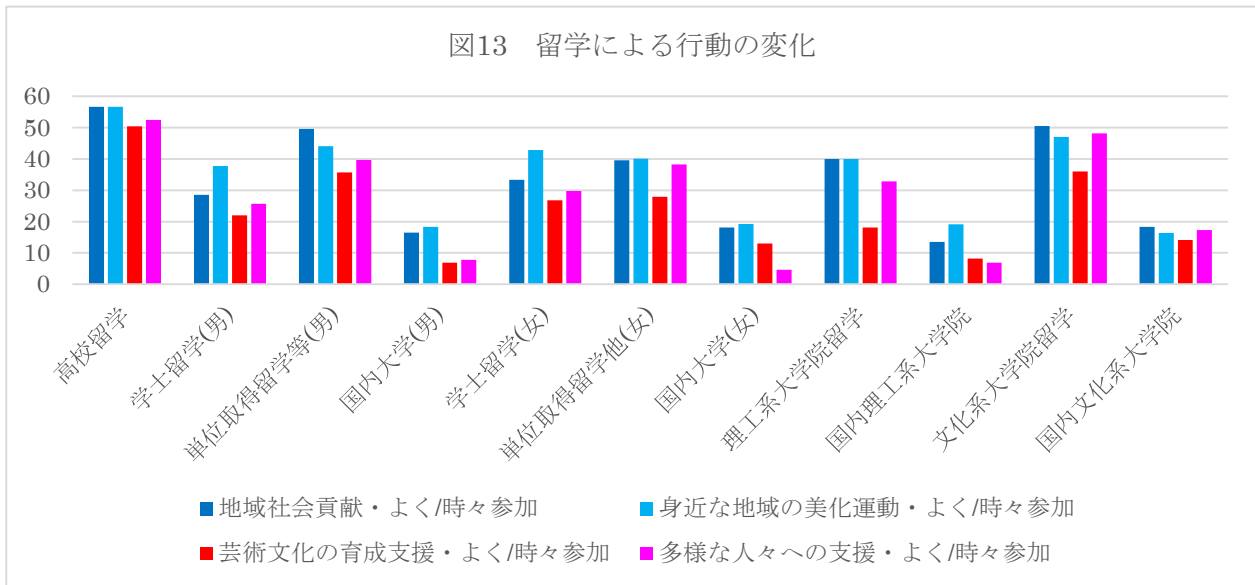
- ①地域社会への貢献活動
- ②芸術文化の発展・育成支援活動
- ③身近な地域の環境美化運動など
- ④多様な価値観や文化背景を持つ人々への支援活動

〈多様な人々との交流活動〉

- ⑤多様な価値観や文化背景を持つ人々への交流活動
- ⑥多様な年齢・世代の人々との交流活動
- ⑦多様な分野で活躍している人々との交流活動

### 5-1 地域社会への貢献・支援活動

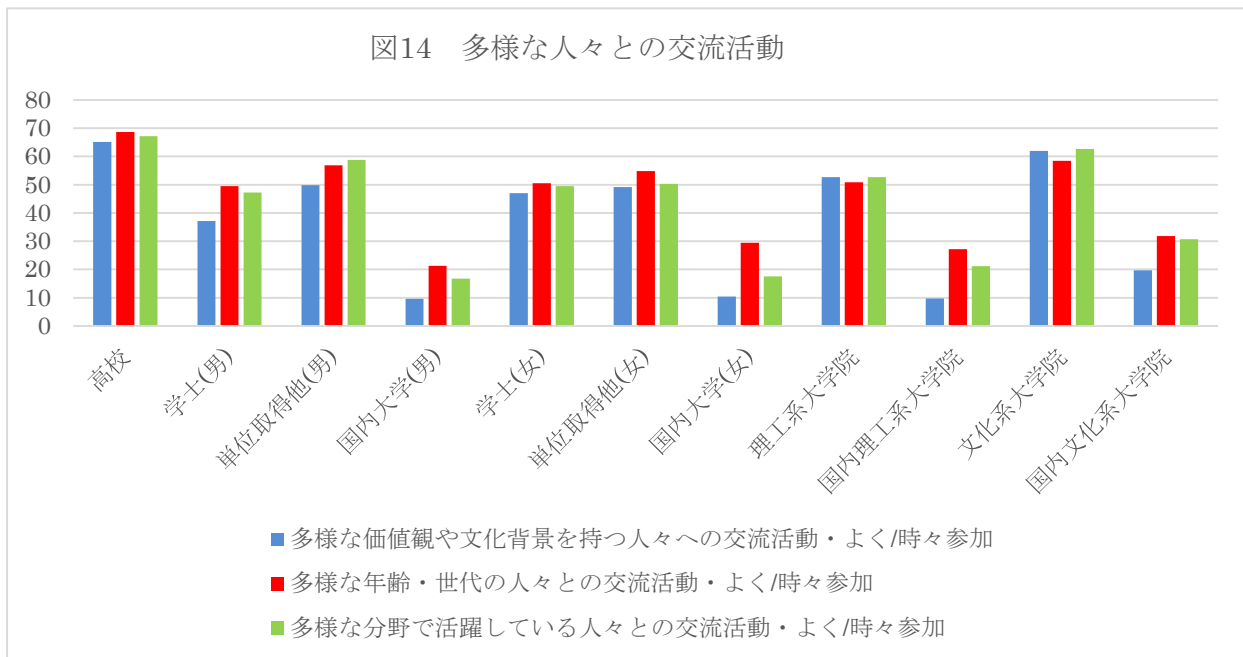
上記7つの内、①～④を地域などへの貢献・支援諸活動、⑤～⑦を多様な人々との交流という視点に分けてみるができる。まず、地域などへの貢献・支援諸活動に対する回答結果としては、図13に見られるように、留学経験者は学校種別に関係なく、ほぼ40～50%が地域社会への貢献・支援活動や運動に参加している。それに対して国内の大学卒業・大学院修了グループは学校種別に関係なく参加率がいずれの活動も10～20%未満と低調であることが分かる。留学経験者の中では、特に高校留学はいずれの活動においても50%を超える点で際立っているが、その他の学校種別間では大きな差は見られない。



以上のように留学経験者の地域社会への貢献・支援活動は、新見・太田・渡部・秋庭(2016)にあるように留学中の様々な社会的な活動への参加経験が、社会全体に対する貢献意欲や姿勢を身につけることで帰国後のより積極的な行動を誘発するという可能性を示唆していると考えられる。

## 5-2 多様な人々との交流活動

⑤「多様な価値観や文化背景を持つ人々」、⑥「多様な年齢・世代の人々」、⑦「多様な分野で活躍している人々」との交流活動の参加状況(図14)をみってみる。3つの交流活動の平均参加率を留学経験者と留学非経験者とで比較すると、文科系修士・博士(61.0%、27.4%)、理工系修士・博士(52.1%、19.3%)、学士女性(50.2%、19.1%)、学士男性(49.8%、19.6%)となった。



留学経験者の大学・大学院レベルでの交流活動状況は、交流相手により若干前後するもののいずれも50%~60%と多くなっている。他方、留学非経験者は、国内文科系修士・博士修了が一番多くて平

均 30%弱であり、その他 3 グループはいずれも 20%にも満たず、留学経験者の方がより多く、より積極的に参加していることを示している。留学非経験者については特に 10%未満と低くなっている⑤「多様な価値観や文化的背景を持つ人々」との交流活動のみならず、⑥、⑦の交流活動も極端に少ないことがわかる。これらのことから留学経験者は、国内における比較的狭い社会空間での限定的な人々と交流している留学非経験者と異なり、留学先で様々な人種や国籍、年齢層や社会階層の人々との接触を体験することで、多様な人々との交流に違和感を持たなくなり、そうした人々と積極的に交流するようになったことを示唆しているのではないだろうか。

多様な人々との交流活動にもっとも積極的なのは、⑤～⑦いずれの交流活動においても約 70%を示した高校留学である。高校留学は、比較的感受性の高い（多感な思春期の）若い年代での留学あるいは留学前の国内での社会的活動体験がほぼ皆無に近い留学という特徴があり、ホームステイを通じた幅広い人たちとの断続的かつ多様な交流機会の影響で、その他の留学経験者よりも多様性に対する意識や行動がより強い影響を受けるようになったのではないだろうか。

以上のことから、留学経験者の地域社会への貢献・支援活動や多様な人々との交流活動に対する行動の変化は留学非経験者と比較して、明らかに肯定的に評価、自覚しており、「グローバル人材」の要素 II（主体性・積極性、チャレンジ精神など）において留学非経験者を上回る行動の変化を獲得していると考えられる。新見・太田・渡部・秋庭(2016)が指摘しているように、留学経験はグローバル社会において活躍するために必要な基本的な能力、意識や価値観の涵養において、効果的な学びの機会をもたらしていると言えるのではないだろうか。

おわりに

今回の調査によって、留学経験者と非経験者との間には、価値観の醸成、能力の向上、年収と役職、キャリアへの影響、留学経験、教育経験の評価、人生や仕事の満足度、教育経験後の行動の変化などの領域で、明らかに大きな差が見られることが分かった。新見・太田・渡部・秋庭(2016)にもあるように留学経験者は、特に能力の向上、意識の変容、社会活動への参加、態度・価値観の変化、キャリア・採用への影響、人生の満足度という 6 つの領域において、留学経験を通じて強いインパクトを受けているといえよう。留学経験者がグローバル人材に求められる各種要因を留学非経験者よりも格段に多く広範囲に習得していると考えられる。

この小論は、「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する比較調査研究」サマリーレポート(2015)をまとめたものであるが、より詳細な分析が新見・太田・渡部・秋庭(2016)や米澤・新見(2016)などで行なわれている。関連する発表や論文等については、下記を参照されたい。

「日本の留学交流の活性化を目指すグローバル人材 5000 プロジェクト」のホームページ  
<<http://recsie.or.jp/project/gj5000/>>



参考文献

1. 小林明 (2011) 「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2011年5月号 Vol. 2
2. 小林明 (2013) 「留学プログラムが参加者に与えた影響に関する調査 —社会人としての留学体験評価—」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2013年8月号 Vol. 29
3. 小林明 (2015) 「留学体験のインパクトと経年変化 —社会人としての留学体験評価(2)—」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2015年8月号 Vol. 53
4. 新見有紀子、太田浩、渡部由紀、秋庭裕子 (2016) 「グローバル人材育成と留学の中・長期的インパクトに関する研究 —留学経験者と留学未経験者に対するオンライン調査結果より—」『アジア文化研究』23号、pp. 3-25 2016年6月
5. 横田雅弘 (2015) 「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査」 科研費プロジェクト「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する比較調査研究」サマリーレポート 2015年9月
6. 米澤彰純、新見有紀子 (2016) 「留学体験の効果意味 —グローバル人材5000プロジェクトの調査結果から—」『IDE 現代の高等教育』No. 581、pp. 47-53 2016年6月
7. 文部科学省 (2011) 「資料2 グローバル人材の育成について」から引用  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf) (2016年7月1日検索)

# 短期海外語学研修はどれほどの効果があるのか

—常磐大学の場合—

## How Effective is a Short-Term Study Abroad

Program ?:

A Case of Tokiwa University

いわき明星大学 大津 理香  
常磐大学 佐竹 正夫  
OTSU Rika  
(Iwaki Meisei University)  
SATAKE Masao  
(Tokiwa University)

キーワード：海外研修プログラム、短期語学留学、語学力向上、情意面での効果、常磐大学、海外留学

### 1. はじめに

文部科学省の調査によれば、日本人の海外留学者数は2004年度がピーク（82,945人）でそれ以降2011年度（57,501人）まで毎年減少している<sup>1</sup>。他方、日本学生支援機構（以下JASSOとする）の「協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」では、この期間1カ年を除き、国内の大学等から協定等に基づいて海外の大学等へ留学した学生は増え続けている。2009年度からは協定等に基づかずに留学した学生数も調査されているが、その数も加えると、2014年度は81,219人と2009年度の36,302人から2倍以上増加している<sup>2</sup>。

JASSOの調査でもう一つ特徴的なことは、留学期間が1ヵ月未満の割合が増えていることである。2009年度は約46%であったが、2014年度は約60%に達している。1ヵ月未満の留学生の多くは、大

<sup>1</sup> 文部科学省ホームページ「日本人の海外留学者数」及び「外国人留学生在籍状況調査」等について（平成28年3月31日）別添1「日本人の海外留学状況」。この調査は、OECDやユネスコなどの資料に基づいている。ここで、日本人の海外留学者には「原則として交換留学などの短期留学は含まない」とされる。[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm)

<sup>2</sup> 日本学生支援機構ホームページ「留学生支援 留学生に関する調査」  
[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html)

学等で実施されている語学習得や異文化交流を目的とする短期海外研修プログラムへの参加者であろう。

水戸市にある常磐大学でも1998年度から米国への海外研修プログラムが始まり<sup>3</sup>、現在では五つの海外研修プログラムが用意されている。米国、台湾、英国、タイ、フィリピンである。期間はいずれも2週間～4週間で、ホームステイや協定校が提供する宿泊施設に滞在しながら、現地の言語を学ぶとともに協定校の学生と交流したり、行事に参加したり公共施設を訪問するなどの異文化体験を行う。この中で米国の研修は、カルフォルニア大学アーバイン校（以下UCIとする）の付属英語学校で実施される「4週間の英会話と文化プログラム」に参加し、英語を学びながら米国の文化に触れるプログラムである。

多くの大学で短期の海外研修プログラムが用意され、しかもその数が増えているのは、グローバル化の時代に対応する教育の一環と大学が考えているからであろう。また、学生（保護者）の側にも語学力向上や異文化体験などへの期待があるのだろう。しかし、1ヵ月に満たない短期の海外研修でどれほどの効果が望めるのだろうか。

12名の学生が参加した2014年度の常磐大学の米国研修に、著者の一人である大津が引率者として参加し、このプログラムが学生の語学力や情意面などにどのような影響を与えたかを、研修前後のUCIのテストやアンケート調査、また4週間学生と生活を共にして得た観察に基づいて報告した<sup>4</sup>。

常磐大学では、2015年度にもUCIへの研修は行われ、9名の学生が参加した。著者らは2014年度と同じアンケート調査を実施し、参加学生がUCIで受けたテストの結果を入手した。そこで、本稿では、この2年間の総参加者21名のデータに基づいて、常磐大学の海外研修の効果を、特に語学面での効果を中心にして、改めて報告するものである。その前に、日本の大学等で実施された1ヵ月未満の海外語学研修を事例とする最近の研究が、それぞれの研修の効果についてどのような報告をしているのかを見てみよう。

## 2. 最近の事例研究

ここでは、日本の大学等の短期海外研修を対象にした2000年前後から2010年頃までの事例研究を取りあげる。これらの研究では、研修によって語学力がどれほど伸びたかという調査に加えて、ホームステイなどの生活体験によって、異文化理解や情意面でどのような変化が見られたのかといった調査が行われている。語学面では、研修後、参加者に語学力向上の程度や語学学習への意欲を尋ねる主観的評価型のものと研修前後に実施するテストの得点差や研修参加者と非参加者の得点差を比較する

<sup>3</sup> 常磐短期大学では、1978年度からイギリスでの海外研修が始まっている。

<sup>4</sup> 大津・佐竹（2016）。

客観的評価型がある。異文化理解や情意面での効果をみる調査では、アンケートやインタビュー、また参加者の日記等の記録が用いられる。

## 2.1 語学面での効果

主観的評価型の事例研究では、ほとんどの研修参加者が語学力全般について研修前よりも伸びたと報告している<sup>5</sup>。中でもリスニング力が伸びたとする報告が多い<sup>6</sup>。このような参加者自身の主観的評価は、テストに基づく客観的な評価と一致するのであろうか。

著者が参照した客観評価型の研究10件のうち、研修前後のテストの得点差を見るものが6件、参加グループと非参加グループの成績を比較するものが4件ある<sup>7</sup>。ここでは前者の研究を取り上げ、短期海外研修によって、参加者の語学力がどれほど伸びたのかを見てみる。表1には、それらの研究6件について、研修期間、参加者数、テストの種類と共に語学力の伸びを研修前後の平均点の得点差から計算した伸び率（小数点第二位で四捨五入）で示している。語学力は、総合力とともにそれを構成するリスニング、リーディング、ライティング、スピーキングなどの個別能力も測定されるが、ここでは総合力とリスニング力を取り上げ、その他の個別能力については「リスニング以外」にまとめて記述している。統計的に有意差がみられたものは赤い太字で記している。

表1の中で、野中（2005）だけが研修前後の総合点とリスニングの平均点の差が5%水準で統計的に有意ではないと報告されているが、他の研究では、リスニング力のみを測定した田浦他（2009）を除いて、いずれも総合点とリスニングが共に有意差ありと報告されている<sup>8</sup>。

表1では、有意差のある事例について、総合点の伸び率は6.4%から11.7%の範囲にある。また、リスニングの伸び率は、8.5%から15.2%（ただし具体的情報に関して）の範囲にあり、総合点のそれよりも全体的に高い。併せて、リスニング以外の語彙・文法やリーディング等は有意差がないとする報告が多く<sup>9</sup>、この結果は参加者の主観的評価に基づく報告とほぼ一致する。また、この中で3件の研究が参加者を研修前の得点によってグループ分けし、下位群に有意な伸びが確認されたことを報

<sup>5</sup> 文野・杉本(2000)、小林(2004)、古屋(2005)、松田(2007)。

<sup>6</sup> 小林(2004)、古屋(2005)、松田(2007)。

<sup>7</sup> 前者の6件は表1に記載されている。後者の4件は、木村(2006)、Sabet(2007)、大塚(2009)、久野(2011)である。

<sup>8</sup> 吉田・小寺(2009)には統計的な検定の報告がないので、論文の表(pp.115~117)を用いて、著者らがt検定を行い、総合点とリスニング(具体的情報)について有意差を確認した。

<sup>9</sup> 小林(1999)は、他と異なって、語彙・文法の伸び率の方がリスニングのそれよりも高い。

告している<sup>10</sup>。

表 1: 客観的評価（研修前後の得点差）に基づく主な研究

研究報告(年号)	研修期間(週)	研修参加者(人)	テストの種類	総合点伸び率(%)	リスニング伸び率(%)	リスニング以外伸び率(%)
小林(1999)	3~4	31	ITP TOEFL	6.4	8.5	10.8
野中(2005)	3	51	TOEFL	0.1	2.3	-1.23
野中(2008)	3	29	TOEIC IP	7.8	12.7	0.5
田浦他(2009)	3	20	TOEFL	NA	11.0	リスニングのみ測定
吉田・小寺(2009)	2	15	CASEC	11.7	具体的情報 (15.2) 大意把握 (13.1)	9.3
木村(2011)	3	14	英検	9.9	11.2	2.34 (語彙・文法・ ライティングのうち ライティングのみ有意 差あり)

## 2.2 異文化理解や情意面での効果

語学力以外の異文化理解や情意面については、積極的な効果を示す報告が多い。例えば、英語や外国人とのコミュニケーションに不安を感じていた参加者が積極的に英語を使うようになった<sup>11</sup>。また、研修が参加者個人にとって様々な形で意味を持って、自己成長や異文化理解を促進した、などの報告がある<sup>12</sup>。次の文章が情意面での効果を簡潔に伝えている。「海外研修での3週間余りは、学生たちにとっては新しい環境における不安に満ちた挑戦であったかもしれない。しかし、彼らはそこにおいて、幾多の人々と出会い、彼らと触れ合うことを通じて、多くを経験し、多くを学び、人間としても大きく成長したといえる。」(安藤、2005、p. 34)

## 3. 常磐大学の事例

### 3.1 短期海外研修A(米国)

この研修では、出発前に7回(1回90分)の事前研修があり、帰国後は1回の事後研修が行われる。UCIに到着すると学生は最初にテストを受けて語学習熟度別クラス(B1クラス=初級、B2クラス=初級+、Cクラス=中級-、Dクラス=中級、Eクラス=中級+)に分かれる。このテストは最終日にもう一度行われた。授業は週5日行われ、学生は毎日2コマ約3時間の授業を受ける。1コマはリーデ

<sup>10</sup> 野中(2005)と野中(2008)は下位群に、総合点とリーディングに有意差を確認している。また、久野(2011)は、吉田・小寺(2009)のデータについてt検定を行い、成績下位群に総合点とリスニングに有意差を認めている。(p. 130)

<sup>11</sup> 小林(1999)、小林(2004)、安藤(2005)、田浦他(2009)、大塚(2009)、黒崎(2013)。

<sup>12</sup> 古屋(2005)、松田(2007)、黒崎(2013)。

ィングやライティング中心の授業で、もう1コマはリスニングやスピーキング中心の授業である。他には週のうち2日の3時間ほど、「カンバセーションパートナー」（以下CPとする）というUCIの学部生1人と4、5人のグループを作って英会話をしたり自由に活動をしたりする時間が与えられる。

CP活動のない日の午後は、引率者の出した課題のために、グループに分かれて現地の学生にインタビューをしたりするほか近隣の州立大学の日本語クラスに入って英語で日本文化について発表したり、現地の日本語学校へ出かけてバイリンガルの子もたちと交流をしたりした学生もいた。2015年度の研修ではUCIで日本語を学んでいる学生と常磐大学の学生がペアになって、相互に日本語と英語の会話を行う機会を持った。週末は、ほとんどの学生がホームステイ先の家にこもらず、UCIの学部生がリードしてくれるディズニーランドなどの娯楽施設へ行くツアーへ参加していた。ホームステイは、一人で一つの家庭に入ることも、二人一組で一つの家庭に入ることも可能で、これは事前に学生が自分の英語力や不安などを考慮して選択できることになっている。

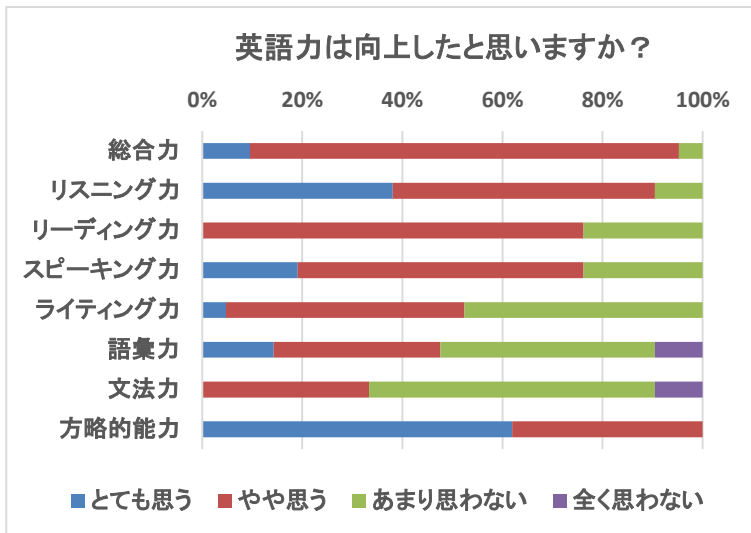
### 3.2 語学面での効果

語学力向上の主観的評価を分析するために、著者らは研修後アンケート調査を行った。客観的評価には、UCIが実施した研修前と後の2度の同じテストの結果を用いた。これは紙ベースのMichigan English Language Institute (ELI) Testingで、リスニングが20問（応答問題）、GVR(文法・語彙・読解)が80問の計100問（100点満点）のテストである。情意面への効果は、研修後のアンケート調査やインタビュー、そして引率者による感想に基づいている。

図1は「英語力は向上したと思いますか」に対する2年分の回答の集計である。この図から以下の点が観察される。第一に、ほとんど全員が総合的な力の伸びを感じている。第二に、4割の学生がリスニング力の顕著な改善を指摘している。第三に、8割近くの学生がスピーキング力やリーディング力も向上したと思っている。第四に、ライティング力と語彙力はほぼ半数の学生が改善したと感じているが、文法力が改善したと思っている学生は半数以下である。最後に、何とか英語でコミュニケーションをとるための方略的能力については、全員が肯定的である。

これらの結果は、最近の事例と同じ傾向を示している。これは、英語の環境に身を置くことや授業がコミュニカティブに展開されたことなどで、英語のインプット量が普段の何倍にもなったことが要因ではないだろうか。語彙や文法に関しては、これまで日本で学習法として馴染んできた方法、つまりテキストをじっくり和訳したり、語彙・文法・読解問題を解いたりする機会が減ったのが原因ではないかと考えられる。実際、学生とのインタビューの中で、「アメリカにいた時は学習のバランスはリスニングやスピーキングに傾いていた」という意見があった。

図1 語学力向上の主観的評価



次に、語学面での客観的評価を見てみよう。表2は、2年分のELI testingの結果である。クラス別と全体の事前、事後のリスニング(L)、文法・語彙・読解(GVR)及び総合点の平均値と標準偏差(SD)が示されている。一番下の欄は参加者全体の各項目別の平均値の伸び率(%)である。研修前後の得点の伸びで有意差が確認されたのは、参加者全体の総合点とGVR(文法、語彙、読解)、成績下位クラス(B1)の総合点とGVR及び成績中位クラス(B2&C)の総合点である。それらは表1と同様、赤い太字で示している。

この表から、次のような事実が観察される。第一に、総合点の伸び率は13.7%と表1のどの事例よりも高い。第二に、総合点の伸びは主にGVRの伸びによるもので、リスニングについては有意な向上を確認できず、リスニング力が伸びたと感じている学生の主観的な評価を裏付けることはできなかった。また、これはリスニング力に有意差を確認した先の事例とも異なっている。第三に、成績下位の学生の伸びが上位の学生のそれを上回っている。有意差が確認されたB1クラスの総合点の伸び率28.0%は同じように有意差が確認されたB2&Cクラスの12.7%の2倍以上である。成績の下位群の伸びが大きいことは、すでに前節の研究の一部が指摘しており、常磐大学の事例もそれに加わることになる。

表2: UCIでのELI Testingの結果(2014年度と2015年度)

クラス	B1 (n=9)			B2 & C (n=8)			D & E (n=4)			全体 (n=21)		
	L	GVR	総合点	L	GVR	総合点	L	GVR	総合点	L	GVR	総合点
事前テスト	6.11 (1.05)	23.44 (5.53)	29.56 (5.70)	8.00 (1.93)	35.38 (4.31)	43.38 (3.78)	11.25 (1.89)	50.50 (7.19)	61.75 (9.00)	7.81 (2.44)	33.14 (11.45)	40.95 (13.32)
事後テスト	7.56 (3.50)	30.33 (5.24)	37.89 (7.22)	9.00 (2.56)	39.88 (5.51)	48.88 (6.81)	10.75 (3.40)	50.75 (10.44)	61.50 (13.72)	8.71 (3.23)	37.86 (9.92)	46.57 (12.06)
平均伸び率(%)	24.6	<b>29.5</b>	<b>28.0</b>	4.7	10.4	<b>12.7</b>	-4.4	0.6	-0.5	11.5	<b>14.5</b>	<b>13.7</b>

表の数値は平均値、( )はSD

### 3.3 異文化理解や情意面での効果

異文化理解については、米国の文化や生活への理解や興味、ホームステイ体験などに関する質問を用意した。これらに対して、ほぼ全員が前向きな回答をし、再び米国で生活してみたいと答えている。今まで練習してきた英語がネイティブスピーカーに通じた喜びを経験したことや、今後の就職に活かしたいという願望が生まれたこと、そして今回は上手く話せなかったけれどもっと練習して上手く話せるようになってホストファミリーの元にもう一度戻って来たいという目標ができたこと等が理由として挙げられていた。これらは米国での異文化体験が充実していたことを窺わせる。

情意面や人間的成長への影響については、研修が今後の語学学習や生活にどのように役立つか、研修を通じて自分はどう変わったか、などについて記述式で回答してもらった。紙幅の関係で、学生の声を詳細に紹介することはできないが<sup>13</sup>、彼/彼女らが「チャレンジする勇氣」「自立」「自信と積極性」「人間関係の大切さ」を得ていることが分かる。これは引率教員である筆者も1ヵ月間一人一人と毎日接している中で少しずつの変化を確認することができた。最終日には、研修初日の不安気な表情は一変し、研修中にできた友人や一緒に生活をしたホストファミリーとの別れを惜しむほどにやわらかいものになっていた。



プログラム修了式後 UCI キャンパスにて

### 4. おわりに

本稿では、1ヵ月未満の短期海外研修はどれほどの効果があるか、特に語学力の向上について、最近の事例研究を紹介し常磐大学の事例を検討した。幅があるにせよ、有意差があった事例では、常磐大学も含めて、総合点でおおよそ10%くらい伸びることが分かった。常磐大学の伸び率が他よりも高

<sup>13</sup> 詳細は、大津・佐竹（2016）pp. 135-136 を参照されたい。



いのは、研修期間が4週間と他の事例よりも1~2週間長いことが関係しているかもしれない。個別の能力では、常磐大学の場合には有意差はなかったが、多くの事例はリスニング力の伸びが大きいことを報告している。また、成績下位のグループほど伸び方が大きくなる傾向は常磐大学の場合でも示された。

異文化理解や情意面については、語学力のようにその効果を定量的に示すことは難しい。しかし、短期間とはいえ、異文化に直接ふれ、その社会で暮らすことは、参加者に量ることのできない何かを残すであろう。常磐大学の研修に参加した学生の一人は次のように述べている。

「英語が苦手だからこそ参加しようと思った海外研修。最初は不安でしたがそんなことも忘れてしまうくらい楽しくて、参加して本当に良かったと思える1ヵ月間でした。見える風景も文化も人も、身の回りで起こることすべてが新鮮でとても濃い時間を過ごすことができました。1ヵ月間で英語のスキルが伸びた自信はありませんが、様々な経験が自分を成長させたと自信を持って言えます。今回の海外研修をきっかけに英語を勉強する時間を増やしたいと思うようになりました。また、いろいろな人に支えてもらった1ヵ月間で感謝の気持ちでいっぱいです。」(常磐大学海外研修A参加者作成のStudy Abroad Report2015, p. 15より抜粋)

**謝辞** 次の方々のご協力に御礼を申し上げます。常磐大学の2014年度と2015年度の海外研修Aに参加した学生の皆さん、常磐大学国際語学交流センターおよびUCI Extensionのスタッフの方々、2015年度研修の引率者であった常磐大学の丸山悦子先生、統計手法について助言を頂きたいわき明星大学の佐藤拓先生。

#### 引用文献

- 安藤喜代美 (2005) 「国際感覚を持つ実践的教養人育成のための名城大学海外研修プログラム (1) : 達成感による学習意欲の向上」『日本科学教育学会研究会研究報告』19(5), 29-34.
- 大津理香・佐竹正夫 (2016) 「短期海外語学研修の効果—先行研究と常磐大学の事例」『常磐国際紀要』20, 123-146.
- 大塚賢一 (2009) 「茨城工業高等専門学校における海外短期語学研修の言語学的教育効果検証—2年間のデータ分析から—」『茨城工業高等専門学校研究彙報』44, 23-30.
- 木村啓子 (2006) 「英語圏滞在が学生の英語力に及ぼす影響—短期語学研修により英語力は向上するか—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』12, 1-20.
- 木村啓子 (2011) 「大学生の海外短期研修の効果への一考察—リスニングとライティングに焦点を当てて」『尚美学園大学総合政策研究紀要』21, 17-30.

- 久野寛之 (2011) 「3週間の短期海外語学研修が大学生の英語能力に及ぼす効果について」『北海道文教大学論集』12, 127-145.
- 黒崎真由美 (2013) 「海外留学の意義と効果—短期海外研修&三カ月留学—」ウェブマガジン『留学交流』29, 1-7.
- 小林健 (2004) “A Study on the Functions of Study-Abroad Programs as an Effective Means of English Education in Japan,” 『明海大学外国語学部論集』16, 11-36.
- 小林敏彦 (1999) 「海外短期語学研修で英語力はどのくらい伸びるものか」『小樽商科大学人文研究』97, 83-100.
- 田浦秀幸・堀井耕太郎・馬西卓徳・岡田宏子・清水大介・柏本恵未・戸成辰也 (2009) 「ニュージーランド短期英語研修の効果に関する一考察」『言語文化学研究 (言語情報編)』4, 1-22.
- 野中辰也 (2005) 「海外語学研修の効果測定」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』35, 7-12.
- 野中辰也 (2008) 「海外語学研修の効果測定 (2)」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』38, 43-49.
- 古屋則子 (2005) “Evaluating a Short-Term Study Abroad Program,” 『文化女子大学紀要. 人文・社会科学研究』13, 19-30.
- 文野峯子・杉本明子 (2000) 「短大生の短期アメリカ研修の効果に関する研究—アメリカ人のステレオタイプと英語力の自己評価への影響—」『広島大学留学生教育』4号, 69-82.
- 松田康子 (2007) 「短期海外研修の意義とその事前研修について—学生の報告書とアンケート調査の結果から—」『名古屋文理大学紀要』7, 45-50.
- Sabet, Mehran (2007) “Are Study Abroad Programs Effective?” 『聖学院大学論叢』20(2), 177-184.
- 吉田三郎・小寺光雄 (2009) 「短期海外語学研修が高専学生の英語力にもたらす効果」『福井工業高等専門学校研究紀要. 人文・社会科学』43, 111-122.

# 海外体験学習におけるルーブリックの活用

## タイ・スタディツアーにおける学びの評価

### Application of Rubrics in Oversea Educational Tourism:

### An Assessment of Learning in Study Trip in Thailand

同志社女子大学現代社会学部教授 藤原 孝章

FUJIWARA Takaaki

(Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts)

キーワード：短期海外研修、グローバル・シティズンシップ、海外留学

#### はじめに

近年、短期海外研修に注目があつまっている。理由は2つある。1つは、高等学校や大学において、政策としての「グローバル人材の育成」に対応して1年をこえる長期の留学だけではなく、1ヶ月以内の短期の海外研修の機会もふえてきたからである。2つめは、それにともない、単なる語学留学ではなく、スタディツアーや海外体験学習といった多様な学習内容をもったプログラムが用意され、アクティブ・ラーニング（活動的な学習）を通して育成する資質能力の一つとして、参加者の学びがグローバルな市民性育成と関連づけて考えられるようになってきたからである<sup>1</sup>。本稿では、後者について同志社女子大学（以下、本学）の取り組み（タイ・スタディツアー）を事例に海外体験学習のプログラムと参加者の学びの評価を紹介したい。

#### 1. スタディツアーとしての海外体験学習

本学の国際交流プログラムは、国際交流センターがプロデュースする語学研修、単位互換の協定校交換留学、国際教養学科2学年全員（約80名）の1年間留学などの他、学科がプロデュースする授業科目がある。筆者が所属する現代こども学科では、海外視察・交流型（台湾、NZ）およびスタディツアー型（タイ）の「海外こども事情」という短期海外研修（授業科目、2単位、8月下旬の約10日間）がある。筆者は後者を企画、実践している。2005年を第1回として、以後2年に1回継続して実施され、2015年で6回目となった（参加者は毎回約20名）。筆者は、「海外こども事情A」を、2005年以来、「問いをもった旅、学びを得る旅」として、スタディツアーという「旅の形」として位置づけており、目標としてグローバルな視野の獲得、体験学習をとおした資質能力の獲得をめざしてきた<sup>2</sup>

## 2. プログラム（訪問先と活動内容）と学びの視点

タイ・プログラムの構成は、①歓送迎会や観光などリラックスできるもの、②学校・施設の訪問や交流、国境やスラム地域、農業地域見学などツアーの目的にそった研修の要素が大きいもの、③ふりかえりやプレゼンなど学びの成果を共有するものという3部だてになっている。また、学内の自主的な研究会の学生が取り組む「絵本プロジェクト」（タイ語のシールを貼った絵本の小学校への贈呈と子どもたちへのタイ語による人形劇のパフォーマンス）も取り入れている。

表1に、2015年（第6回）のプログラムの概要（主な訪問先と活動内容）と学びの視点を示した。学びの視点の1つは、「まなざし」である。見る側／見られる側、買う側／売る側、支援する側／される側という自他の峻別をしない視点、相互に入れ替え可能な視点の獲得である。これがなされないと単なる一過性の旅行者、ゲストになってしまっ、連結性（自分や自国への視点、継続した学びの視点）を失ってしまう。2つめは「変化」である。2013年（第5回）のツアーから実感したのは、タイ北部にもおしよせてきたグローバリゼーションの波であり、タイ社会の急速な変化である。タイはもはや貧困国ではない。中進国（新興工業国）である。大型ショッピングセンターの出現、バイク社会から車社会へのモータリゼーションの変化、高校生にいたるまでのスマホの保持、wifiなどネット環境の整備、農業人口の減少と高齢化、隣国のミャンマー、ラオスからの合法非合法の外国人労働者の増加、ストリート・チルドレンなど可視的な子どもの貧困の減少、中国人観光客の増加などがそれぞれである。変化という視点を持ち、その過程で生起する課題を追究できないと、「路上で働いているこどもがいないからだめ」、「スラムの家屋にテレビやバイクがあるのはおかしい」といった、ステレオタイプを裏返した偏見しか身につかなくなる。3つめはタイ社会における「排除と包摂」の課題である。セックスワーカー、山岳民族、外国人労働者など人の移動（人身取引も含む）にともなう社会の多民族化による市民権や言語、民族における排除と包摂、エイズ孤児やスラム地域、貧困農村など社会の格差化から生じる貧困における排除と包摂である。そして両者は重なりあうことも多い。このような社会の階層性と関係性のなかで動的に課題を追究する視点も重要となっている。

表1 主な訪問先と活動内容（2015年、筆者作成）

訪問先・活動	課題・イシュー	学びの視点
メーサ象キャンプ、山岳民族資料センター、ドイステップ寺院などの名所観光	観光文化、観光のための開発、山岳民族、ストリートチルドレン、経済のグローバル化	観光：見る側・見られる側の視点・ボーダーレスなモノ、人の移動、変化
売春の当事者たちの意識向上や生活支援にかかわるエンパワー財団	山岳民族、売買春、HIV/AIDS、女性のエンパワー	売買春：売る側・買う側の視点、ボーダーレスな人の移動
ISAC（持続可能な農業地域研究所）の社会教育活動	持続可能な農業、女性のための職業訓練	農業の持続性、女性の職業訓練の意義、変化
チェンマイ郊外、サンサイ小学校	タイ北部の移民の子ども	タイ社会における排除と包摂、変化
チェンライ郊外メー・ロー・ライ小学校、絵本の贈呈、人形劇	貧困、HIV/AIDSと子ども支援、参加型地域開発	支援する側・される側の視点、地域における学校・教師の役割
チェンライ YMCA（こどものケアのプロジェクト）、ワカタケホーム（熊本 YMCA の支援）	保健医療活動をとおした地域開発、北タイの地域開発、タイにおける山岳民族の若者寮	北タイおよび近隣諸国における YMCA の活動の意義、山岳民族の排除と包摂

メーサイ、タイ・ミャンマー国境、 国境警察署	国境地帯における人の移動、児童労働、移民労働者、麻薬問題	経済のグローバル化とボーダーレスな人、モノの移動
バンロンサイ（日本のNGO）	エイズで親を失った子どもの支援	施設収容型支援のあり方
スラム地域（チェンマイ YMCA の子ども支援）	スラム地域、児童労働、子ども支援	人の移動、貧困、排除と包摂、変化
オーガニック・マーケット（朝市）、 コーヒー栽培村訪問	フェアトレード、コーヒー栽培	農業の持続性、公正な取引、変化
チャックナム高校訪問	文化交流、ピアサポート	タイ社会の階層性、変化
日々のふりかえり、英語による発表	スタディツアーでの学び。	学びの共有、プレゼンテーション

### 3. 学びの評価の機会と手だて

海外体験学習は、短期間であっても国境を越えて異なる文化にふれ、現地の人々と交流し、グローバルな課題に直に向き合うなど「非日常」の体験を核とするがゆえに、「行ってよかった」「すばらしかった」「人生観が変わった」といった即時的な学習効果をえられることは筆者の経験からもあきらかである。しかしながら、現地での学びをどう語るのか（体験の言語化）、どのような学びがどのようにして身に付いたのか（学びの契機と変容、メタ認知化）、学びがどうすれば社会化され、持続されるのか（市民性の育成）といった、「体験を学びに変える」手だてが課題であることも経験者ならば実感することである。

表2 学びの評価の機会と手だて

- ①事前学習での思考地図。課題の探究と発表
- ②現地でのパフォーマンス（活動）
- ③ウエビング（学んだこと）とプレゼンテーション
- ④帰国便でのプログラム評価
- ⑤事後レポート（3000字以上）
- ⑥学びの履歴カード
- ⑦学びの変容（4契機）の自己評価（ループリック）
- ⑧DWCLA10\*の自己評価（ループリック）\*5参照
- ⑨学内・学外報告会
- ⑩報告書（レポート）、DVDの作成
- ⑪生涯にわたる学び（キャリア形成と変容）

表2に、スタディツアーにおける学びの評価の機会と手だてを示した。

①は事前学習でのグループ活動と発表、②は、グループによる現地での交流、パフォーマンス、③は現地での毎日のふりかえりをふまえた、一人ひとりによる学んだことのウエビングによるまとめとプレゼンテーションである（写真1）。現地ではこの3つめの評価の機会がもっとも学習効果の高いものである。④は、帰国便（乗り換え待ち時間）での、参加度、学び度、推薦度の自己評価を含むプログラム全体の5段階評価（選択式および選択理由の記述）である。プログラムの終了直後であり各年度とも5点満点に近い高評価が与えられており、体験学習・スタディツアーの高揚感、充実感がよく示されている。⑤から⑧は、帰国後、1ヶ月以内での提出とした課題を評価の手だてとしたものである。学生が、フィールドノート（日誌）をもとに自らの学びを焦点化したものである。⑤の事後レポートは文章記述であり、⑥の学びの履歴カードは、現地で英語によるプレゼンテーションをおこなったウエビングをもとに、自らの学びを振り返るものである。⑤の事後レポートは、第1回目から毎回継続しているもので、⑩の『報告書<sup>3</sup>』の中心となり、一人ひとりの質的な学びの獲得、変容の様子が見て取れる。個人差があるが、⑪の生涯にわたる学びへのヒント、方向性を示すものともなっている。

る。⑥の学びの履歴カードは、2011年から実施し、現代こども学科での4年間の学びの記録（ポートフォリオ）の一つとして、海外こども事情での学びのエビデンスを示すものである。

#### 4. ルーブリックと学びの変容の自己評価

⑦の学びの変容（4契機）の自己評価については、前回（2013年）から導入し、自由記述式とした。学びの変容の4契機にかかわる問いを設け、記述回答を得たのだが、今回は、これをルーブリック化し、事前研修において達成目標として示し、自己評価を数量化できるようにした（表3）。ルーブリックとは、「学習目標との関係において求められる達成事項の質的な内容を文章表現したもので、学習の達成状況レベルを評価する時使用される評価基準」である<sup>4</sup>。4つの契機である①参画性、②状況性、③関係性、④連結性について、10個の規準（〇〇できた）を設け、A：規準をこえて十分に到達した、B：到達した、C：到達しなかった（できなかった）、の3段階の評価を行えるようにした（表5および本文参照）。その際、自己評価の理由などコメント記入欄も用意した。

表3 学びの変容の4契機<sup>5</sup>と10の規準（ルーブリック）

①参画性：参加者による学習課題の設定、学習支援者としての現場スタッフ。 ②状況性：脱文脈化された知識、机上の知識ではなく、実践されている活動の現場における文脈の知。 ③関係性：参加者間、現場スタッフなどの関係から学ぶ。あらかじめ決められた知識ではなく、その都度創られていく知識＝「動的情報」。 ④連結性：学習経験の転移、動的情報の他の場所へのつながり。		
参画性	1	自分の学習課題をもち、その学習課題の解決のために自ら調べ、質問し、話し合うことができた
状況性	2	タイにきて見聞し、活動するなかで、「えっ、どうして？」など、事前に調べてきた知識や考えていたこととちがっていて、自分の中でジレンマや葛藤を感じる事ができた。
	3	タイでの活動が、「ああそういうことだったのか、こういうふう考えるのか」という新たな発見や変化につなげることができた。
関係性	4	現地で、スタディツアー（学び合う集団）の一員としての絆を深めることができた。
	5	チェンマイYMCAのスタッフ、現地の子どもや高校生と積極的に関わることができた。
	6	参加者との活動や現地スタッフのアドバイスを自分の学習課題の追究に役立てることができた。
連結性	7	タイで見つけた課題の中で、タイ人にしかできないこと、タイ人と一緒にできること、に分けて考えることができた。
	8	タイで見つけた課題の中で、自分が日本でもできることがあることを発見できた。
	9	タイで見つけた課題の中で、タイだけではなく、日本の課題にも共通しているものがあることを発見できた。
	10	帰国後も今回の経験を活かすことができる。

表4は、参加者20名の集団としての到達度を示すものである。到達度A、Bの合計はどの項目も17人以上（85%以上）であり、連結性7、8をのぞくとあとの8つの規準については、19人以上（95%）であり、スタディツアーにおける学びの変容の契機が優れて獲得されていることがわかる。このような達成度の高い学びが得られた最大の要因は、現地スタッフとの密度の濃い関わり、具体的な訪問先でのフィールドワークとともに、毎日のリフレクションによる情報の共有、議論などが大きく貢献しているものと確信している。

表4 学びの変容の4契機の到達度（筆者作成）

評価	参画性1	状況性2	状況性3	関係性4	関係性5	関係性6	連結性7	連結性8	連結性9	連結性10	合計
A	16	15	17	17	13	15	6	6	13	19	137
B	3	4	2	3	7	4	10	11	6	1	51
C	1	1	1	0	0	1	3	3	1	0	11
*							1				1

\* 未記入 A：規準をこえて十分に到達した、B：到達した、C：到達しなかった（できなかった）

#### 5. 海外体験学習において獲得される資質能力-DWCLA10のルーブリック活用-

今回、海外体験学習の評価については、もう一つルーブリック化をはかった。それは、本学が授業科目のシラバスに記入を義務づけている DWCLA10 の力である。DWCLA10 とは、本学の学生が4年間をとおして身につけるべき資質能力、社会人基礎力を示すものでもある。これを、ルーブリック化し、「DWCLA10 はどのような場面で、どのような方法で獲得できましたか」という問いとともにその到達度を、学びの変容と同じく、A、B、Cの三段階で自己評価するものとした。

表5によると、A、Bの違いはあるが、〈3〉創造力、〈4〉プレゼンテーション力、〈9〉自己管理能力をのぞく7項目において、全員が規準に到達した（身についた）と評価している。このうち、Aの規準以上に達した資質能力の上位5つは、コミュニケーション力、変化対応力、分析力、思考力、自己実現力であり、海外体験活動での交流や活動、ふりかえりなどによる自己の学びや自己の成長への気づきをもたらしたものと見える。C評価のある〈4〉プレゼンテーション力については、英語での発表に力不足を感じた結果であり、〈9〉自己管理能力については現地で体調を崩したことの自己評価であると考えられる。

表5 DWCLA10とルーブリック（筆者作成）

1. 分析力、2. 思考力、3. 創造力、4. プレゼンテーション力、5. コミュニケーション力、6. リーダーシップ、7. 思いやる力、8. 変化対応力、9. 自己管理能力、10. 自己実現力											
	<1>	<2>	<3>	<4>	<5>	<6>	<7>	<8>	<9>	<10>	合計
A	17	17	9	8	18	4	16	18	11	17	135
B	3	3	9	9	2	16	4	2	7	3	58
C	0	0	1	3	0	0	0	0	2	0	6
*			1								1

\* 未記入 A：規準をこえて十分に到達した、B：到達した、C：到達しなかった（できなかった）

一過性で終わらせないスタディツアーにするには、事後レポートや学びの変容に関する自己評価も重要であるが、自らの体験をいかに他者に伝えていくか、が重要である。「海外こども事情」で学んだことが、教員採用試験や企業での就職活動に大いに貢献したというのは、過去の参加者の多くが認めることである。そのためには、自らの体験をふりかえり（省察）し、客観化し、経験したことの無い他者に伝えていく「自分のツール」にしていく作業が必要である。そのためにも、他者に伝える機会が必要である。今回も、事後レポートが出そろったあとに、学内報告会（写真2）や1年生の授業での紹介、他大学の学生とともに発表する機会を得た<sup>6</sup>。

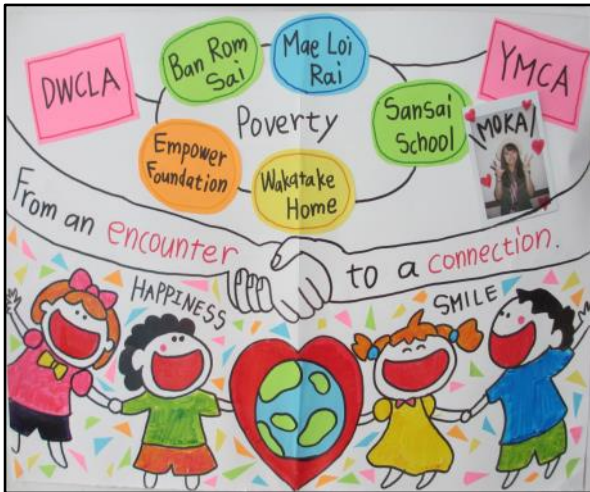


写真1 体験の言語化  
(英語でのプレゼンテーション)



写真2 学内報告会

おわりに

ルーブリックの利点は、学びの契機と変容、学びの中味を規準としてあらかじめ示すことによって、参加者の学習の可視化がはかれることである。学習体験の言語化の契機は、現地でのプレゼンテーション、事後レポート等によって保証されるが、それらの一連の活動の意味付け(メタ認知化)を参加者に促すのが、ルーブリックである。ルーブリックは参加者の自己評価であるとともに、担当者の評価規準にもなりうるものでもある。

<sup>1</sup> 日本国際理解教育学会編 (2014 : 36-74) 『国際理解教育』 Vol. 20 号 (特集「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」)

<sup>2</sup> 藤原孝章 (2013 : 58-74) 「学士教育におけるグローバル・シティズンシップの育成-『海外子ども事情A』(海外体験学習)の場合-」日本グローバル教育学会『グローバル教育』

<sup>3</sup> 同志社女子大学『海外子ども事情A タイスタディツアー報告書』(2015年版)

<sup>4</sup> 辰野千尋・石田恒良・北尾倫彦 (2006 : 174) 『教育評価事典』図書文化社

<sup>5</sup> 渡辺恵 (2001 : 11-21) 「国際協力市民組織 (NGO) における人材育成に関する事例研究-NGO スタディツアー参加者の学習プロセスの分析-」筑波大学大学院博士課程教育学研究科『教育学研究集録』第25集

<sup>6</sup> 「大学における『海外体験学習』研究会」での発表 (2015年12月、大阪大谷大学アベノハルカスキャンパス)



# 海外留学への期待

—立教大学の国際化推進事例から—

## Expectations of Study Abroad:

## Global Initiatives of Rikkyo University

立教大学副総長 山口 和範

YAMAGUCHI Kazunori

(Vice-President, Rikkyo University)

キーワード：リベラルアーツ、リーダーシップ、海外留学

### はじめに

21世紀にはいり、ICTの急速な発展とグローバル化の進行により、これまで経験したことのない変化の激しい時代を迎えました。その変化の波は我々の予想をはるかに超え、10年後をイメージすること、分野によっては数年後すら予測することが難しい時代に突入したといっても過言ではないでしょう。

世界はかつてのように、またいまも、多くの新たな問題に直面しています。一方、世界平和の追究は非常に困難な永遠の課題です。複雑化し不確実な予測困難なこのような時代こそ、ひと時の満足に留まることなく、変化を恐れず新しいことにチャレンジする勇気を持った若者が求められます。また、1つの科目や単独のディシプリンで解決できる問題ばかりではなく、複数の専門分野を融合させてこそはじめて問題と向き合えるような課題も多くなってきており、多様な経験、種々の分野の専門を持つ人たちが集うなかで、健全なリーダーシップを発揮できる人材が求められています。

海外留学を通じた学びや体験は、いまの若い人々へのこのような社会からの期待に応えるための有効な手段だと考えます。今回は、立教大学の国際化への取り組み状況の紹介を通じて、海外留学の意義について考えていきたいと思えます。

### 立教大学の国際化戦略

立教大学は、「グローバルリベラルアーツ×リーダーシップ教育×自己変革力—世界で際立つ大学

への改革」をスーパーグローバル大学創成支援の構想に掲げ、急速に進む社会のグローバル化と変化する世界のニーズに迅速に対応するため、「カリキュラム」の改革、「学生意識」の改革、「ガバナンス」の改革の3つの改革を軸とした取組みを進めています。これらの改革の実行により、学生・教職員の流動化を最大化し、大学の国際通用性及び国際競争力を向上させるとともに、創造性と展開力を備えた自己変革力のある大学を目指しております。

このスーパーグローバル大学創成支援の構想は、2014年5月に公表した「Rikkyo Global 24」で示した国際化ビジョンを基礎とするものであり、その後、創立150周年にあたる2024年に向けた「VISION2024」を策定し、本学の建学の精神を現代的に捉え直し、未来に向けた道筋を明らかにしています。

立教大学は、創立以来、一貫してリベラルアーツと国際性に通ずる教育に取り組んできました。2017年からは、グローバル・リベラルアーツ・プログラム（GLAP）は、創立以来培ってきた本学の経験を結集し、立教大学全学の協力のもとで実施する新しいプログラムをスタートさせます。このプログラムでは、卒業までの間に1年間の海外留学を義務付けています。

スーパーグローバル大学創成支援も2016年度で3年度目を迎え、本学の国際化は制度・環境整備の段階から新たなプログラム実施の段階へと順調に進んでいます。スーパーグローバル大学創成支援構想の基礎となっている「Rikkyo Global 24」で掲げた2024年までの主要な数値目標と進捗状況は次の通りです。

#### 「学生の海外経験率を100%へ」

2015年度通年で正課プログラム参加者934名、正課外プログラム参加者109名。

#### 「外国人留学生数を2,000名に」

2016年5月時点 正規外国人留学生551名、特別外国人学生161名、合計712名。

#### 「海外協定大学を300校に」

2016年5月時点 170校

海外派遣、受入れ、海外協定校開拓数、いずれも着実に増加しており、組織制度整備（ガバナンスの改革）、プログラム開発（カリキュラムの改革）、学生への周知（意識の改革）の取組みが効果を挙げています。

本学の国際化に関する主要な新規プログラムとして、グローバル教養副専攻、国際連携大学院（リンケージ）プログラム、GLAPが挙げられます。グローバル教養副専攻と国際連携大学院（リンケージ）プログラムは2016年度よりスタートしました。全学生を対象としたグローバル教養副専攻での副専攻の修了のためには、海外留学を含む海外体験が必ず求められます。

## グローバル・リベラルアーツ・プログラム (GLAP)

GLAPとは、自ら考え、行動し、世界と共に生きるグローバルリーダーを輩出するため、立教大学の140年以上にわたるリベラルアーツ教育に基づいた新しい学びの形です。GLAPは独立した学部ではありませんが、学生が4年間所属する「コース」という位置づけです。英語により行われるリベラルアーツ科目を中心に独自に編成されており、原則として英語による授業科目のみの履修で卒業することができます。

多様な価値の併存する現代社会において、複雑な課題の解決には深い専門知識が重要であるだけでなく、広い教養を駆使して柔軟に対応できる思考力が求められています。特定の分野に偏らない学問領域（アーツ）を修得することにより、自由に「精神を解放」し「真理の終わりのない追求」を実践することが本学の建学の精神に通ずる「リベラルアーツ」です。混迷する現代や未来において、さまざまな課題に向き合うために必要とされる学びとしての「リベラルアーツ」と海外留学の組み合わせで、グローバルリーダーを輩出するプログラムを目指しています。

### GLAPカリキュラム

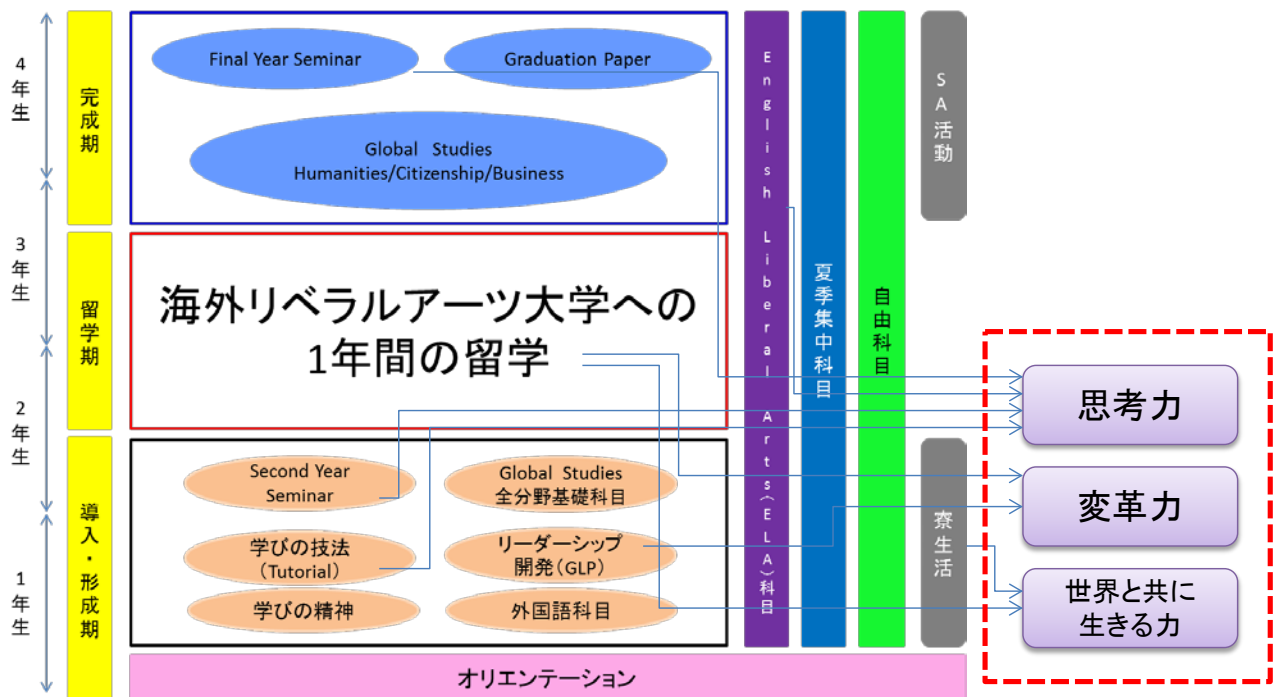


図1 GLAPカリキュラムイメージ

具体的には、GLAPでグローバルリーダーに必要な次の3つの力の修得を目指しています。

- ①課題に正面から向き合い、問題の本質を論理的に解明する力（思考力）
- ②変化が激しい社会に対応し、新しい仕組みを生み出していく力（変革力）
- ③異なる文化及び習慣を持つ人々と課題を解決していく力（世界と共に生きる力）

このために準備されている GLAP の 5 つの特長は次の通りです。

### 英語で学ぶ

GLAP とは、入学時から所属するコースの名称で、原則英語で授業が行われる科目の履修だけで学位の取得が可能です。GLAP に入学した学生は、4 年間 GLAP というコースに所属します。リベラルアーツは、自由に学問の世界を探訪し、視野を広げ、さまざまなものの考え方を理解する学びで、立教大学の教育の特長的なものです。GLAP では、リベラルアーツを英語で学び、日本にいながら常に「世界」を意識できる環境に身を置くことができます。特定の分野に特化した学修ではなく、複数の分野にわたって学ぶため、多様なものの見方・考え方を養うことができ、グローバル化が加速する社会において最も重要な、世界の人々と理解し合いながら協働する力を養うことにつながります。GLAP での学びや経験を通じて、英語によるコミュニケーション力、思考力、表現力など、実践的な英語力や卒業後に広く世界で活躍できる力を身に付けることができます。

### 少人数教育

GLAP は 1 学年 20 名で教員との距離が非常に近く、学生一人一人がきめ細かな指導を受けることができる教育環境です。1 年次の Tutorial では最大 5 名という超少人数で導入教育を行います。学生が自ら積極的に学修に取り組めるよう、文献講読やエッセイ・ライティング、ディスカッション、プレゼンテーションなどのスキル、クリティカル・シンキングやアカデミック・ライティングなど、論理的思考の基盤となる力を身に付けます。また、グループワークとプロジェクト型学習を通じてリーダーシップスキルを育てる、立教大学独自のリーダーシップ教育により、メンバーと協働して課題解決を図る力を身に付けていきます。学生同士が学び合うと同時に、学生一人一人が世界の課題に当事者意識を持ち、さらには、自分を高め続ける意識が芽生え、率先して学ぶ姿勢へとつながります。

### 留学生との寮生活

2 年次の秋学期から始まる留学までは、留学先での寮生活を視野に入れ、GLAP 生全員が寮で生活します（全寮制）。大学の授業だけではなく、普段の生活も含めて密な人間関係を築き、刺激し合い、そして互いに切磋琢磨します。この寮では留学生も一緒に生活します。国籍も文化も価値観も異なる留学生たちと寝食を共にし、自主的に寮の運営も行うことで、多様なバックボーンを持つ人々と力を合わせて課題に取り組むという、貴重な経験を重ねていきます。寮で生活する時間が、国際性を育み、グローバルな感覚を磨いていく。それは、2 年次秋学期からの留学をより有意義なものにする貴重な経験となります。

## 1年間の海外留学

2年次の秋学期から3年次の春学期までの1年間、全員がGLAP生のために選ばれた海外の協定校に留学します。協定校はいずれも伝統的にリベラルアーツ教育に定評のある大学。GLAP生の未来を見据え、厳選した名門校です。留学にあたっては、アカデミック・アドバイザーと連携し、履修状況なども考慮して、留学先や履修科目を検討します。日本とは異なる環境で、多様な文化や習慣に触れ、他者と共に学ぶことは、自らの新しい可能性を発見すること、英語によるコミュニケーション能力を向上させること、そして国境を越えた幅広い人的なネットワークを形成することにもつながります。

## 帰国後の専門教育

留学からの帰国後、GLAP生は引き続き、複数の分野にわたる科目を履修しながら、より広い視野を身に付けていきます。同時に、1年次からの学びや留学経験などを経て、自らが特に興味や関心を持った領域について、「Humanities」「Citizenship」「Business」という3分野から選択し、より深く学びます。4年次には、4年間の学びの集大成として、「Final Year Seminar」を履修するとともに卒業論文（Graduation Paper）の執筆に取り組みます。

GLAPは、立教大学における新たな取り組みです。自由に学問を探究するリベラルアーツの精神は、さまざまな課題に向き合う思考力や変革力、さらに異なる価値観を持つ人々と共に生きる力を養います。海外留学を含むGLAPが、未来を担うグローバルリーダーのためのプログラムとなるよう立教大学は努力していきます。

## グローバルリーダーへの期待

まとめとして、変化の激しいグローバル社会において求められるリベラルアーツ、および協働できるリーダーの役割について考えてみましょう。

大学は、理想の明日を追い求める機関です。予測困難で複雑化した現代社会において、その理想社会を追い求めるためにも、大学が果たすべき役割はますます大きくなっています。新たな問題にチャレンジする若者が朽ちることのない学びに切磋琢磨する環境を用意できるのも大学です。将来にわたり学び続ける基礎を固め、健全な批判的精神を養い、あふれる情報の中で真実を追い求める探究心を身につけるリベラルアーツ教育こそ、いままさに求められる教育だと立教大学では考えています。さらに、世界中の仲間たちとチームを組み、ゴールを目指すリーダーシップを兼ね備えた人材が必要とされ、協働できるグローバルリーダーを多く輩出することが現代社会の大学の役割です。

立教大学は140年を超える教育と研究の歴史を持ち、リベラルアーツを重視した教育を行ってきた実績を持っています。このようなりベラルアーツ教育に伝統ある大学が、世界に直結する形で新た

なグローバル・リベラルアーツ・プログラムをスタートさせることは、日本における高等教育の在り方に大きな変化をもたらすものと期待しております。第2次大戦後に日本の大学が日本に対して果たしてきた貢献は大きなものがあります。一方、グローバル化した世界において十分な対応ができていない部分が少なからずあります。立教大学のこの新たな取り組みは、日本の良き伝統を踏まえた日本発のグローバルリーダー育成プログラムです。思いやりがあり謙虚でありながら、確固たる自信を持つグローバルリーダーがここから育つことを期待しています。

留学生とともに過ごす寮生活、海外留学での学びや様々な体験を通じて、多様性への理解を深めるとともに、「いつでも、どこでも、だれとでも」、身につけた専門性をきちんと発揮できる自信を高めてほしいと思います。地域で活躍するためにも、グローバルへの理解が必要で、またグローバルに活躍する際にも、それぞれの地域への理解や各自の立ち位置への理解が求められます。このようなローカル・グローバルへの理解を深めるために海外留学はとおきの手段だと思えます。明日を担うグローバルリーダーとして羽ばたくため、多くの若い人たちが海外留学に飛び立つことを願っています。

# 中国の高校生にとっての海外留学

—高級中学国際部の教育課程に焦点を当てて—

## Study Abroad for High School Students in China:

## Focus on International Divisions of Senior High Schools

大阪樟蔭女子大学学芸学部 小野寺 香

ONODERA Kaori

(Faculty of Liberal Arts, Osaka Shoin Women's University)

キーワード：中国、国際部、海外留学

### はじめに

昨今のグローバル社会の進展とともに、さまざまなモノやサービス、さらに人の移動が増加してきている。留学生数も近年顕著に増加してきており、2013年には自国以外の高等教育機関で学ぶ留学生が400万人の大台を超えた<sup>1</sup>。このうちアジアの学生が53%を占めており、なかでも最大の留学生送り出し国が中国である<sup>2</sup>。一方、最大の留学生受け入れ国はアメリカであり、2013年には世界の留学生の19%を受け入れていることになる<sup>3</sup>。そのアメリカでも中国人留学生の割合は高く、例えば2014年には30万4,040人であり、留学生総数の31.2%までも占めるに至っている<sup>4</sup>。これだけの数の中国人がアメリカへと留学する要因はさまざまであるが、中国の1点を競う大学入学試験が受験生に過度な精神的負担を与えていること<sup>5</sup>、経済発展によって子どもを海外へ留学させるだけの経済的余裕のある中流層が増加したこと<sup>6</sup>、アメリカの高等教育機関の方が質の高い教育を受けられると考えていること、創造性や批判的思考力を修得するのに適切であると考えていること等が挙げられている<sup>7</sup>。また、学士課程段階でアメリカの高等教育機関へ留学する中国人の数が増加してきていることは以前から指摘されており<sup>8</sup>、2009年の教育部（日本の文部科学省に相当）による調査によれば、高級中学（日本の高等学校に相当）卒業生で国内の大学入学試験を放棄した者のうち、21.1%は海外の大学への進学を理由として回答したという<sup>9</sup>。そして、2014年にはついに学士課程段階での留学生数が大学院段階（修士・博士課程）のそれを上回ってきている<sup>10</sup>。

こうした学士課程段階の留学に対するニーズが高まってきたため、都市部の一部の高級中学は「国

際部」という組織を設置してそれに対応している。そこでは、近年日本でも注目される国際バカロレア (International Baccalaureate、以下 IB) やアメリカの高大接続プログラムであるアドバンスト・プレースメント (Advanced Placement、以下 AP) を実践している<sup>11</sup>。IBは、「言語」、「科学」、「数学」、「芸術」等の6つの科目群から1科目ずつ履修することに加え、生徒自身が課題を設定する「課題論文 (Extended Essay)」、学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を検討する「知識の理論 (Theory of Knowledge)」、学問以外の生活や地域に根ざした奉仕活動による経験や共同作業による協調性を重視する「創造性・活動・奉仕 (Creativity, Action, Service)」を履修する必要がある<sup>12</sup>。IBで生徒は二年間でこうした多様な科目をバランスよく履修することができ、さらにそこでの教授言語は基本的に英語であるため、グローバル人材育成という観点からも適切な教育プログラムとして中国でも注目されている<sup>13</sup>。一方、APは大学1-2年次向けに開設される授業内容と同水準の科目を高校生が高校で履修し、同科目に関する統一試験の結果が優秀であれば、それが大学の単位として認定されるアメリカ生まれのプログラムであり、2011年には3,300校の大学がその成績に応じて単位認定している<sup>14</sup>。APには、「言語」、「数学」、「歴史」、「科学」等から「芸術」や「音楽」まで、多様な36科目について基準となるカリキュラムが用意されており、その中から高校は開設する科目を選択する。また、高校が開設する科目から生徒は自らの関心に基づき、自由に選択履修することになる。したがって、制度上は1科目のみの履修も可能である。

中国の高級中学でこうしたプログラムを履修することによって、高級中学卒業後の留学を有利にするために「国際部」への入学を希望する生徒は非常に多い。ただし、「国際部」はあくまでも中国の高級中学であることに鑑みれば、そこでは中国の教育部が規定する教育課程を履修する必要があることは言うまでもない。本稿では、IBやAPと中国国内の教育課程の関係に着目し、「国際部」において生徒の留学を促す要因について検討を加えることにしたい。

### 中国の高級中学の卒業要件

上述のように、「国際部」は中国の高級中学として教育制度上位置づいているため、まずは中国の高級中学の教育課程について言及する。1980年代まで、中国の教育課程といえば全国共通の画一的教育課程と表現されてきたが、1990年代以降のそれは、この点を改革すべく「多様化・個性化」をスローガンとして進められてきた。現在の中国の高級中学の教育課程は、「必修課程」、「選択Ⅰ」、「選択Ⅱ」という三つに区分されている。そのうち、「必修課程」は「言語と文学」、「数学」、「人文と社会」、「科学」、「技術」、「芸術」、「体育と健康」、「総合実践活動」という八つの領域に分かれているが、各領域には複数の科目が設定されている。例えば、「言語と文学」には「国語」と「外国語」の二科目、「人文と社会」には「思想政治」、「歴史」、「地理」の三科目、「科学」には「物理」、「化学」、「生物」の三



科目が含まれていて、こうした各科目に関して修得単位数が規定されており、それらの合計が116単位となる<sup>15</sup>。

一方、「選択Ⅰ」には「必修課程」の内容をより発展させたもの、例えば理系であれば「物理」や「化学」等が含まれ、「選択Ⅱ」には地域や学校の状況、生徒の関心等を考慮した内容が含まれる。実際、「選択Ⅱ」には学校が独自に開設できる「学校課程」が設けられている<sup>16</sup>。また、規定上は、「選択Ⅱ」から最低6単位を修得し、「必修課程」の116単位と合わせて合計で144単位の修得が必要とされているが、実際には学校側が生徒の修得単位数を144単位以上に設定することで全体の30%を「学校課程」に充てる場合もある<sup>17</sup>。このように、教育課程に関する学校側の管理自主権が強調され、実質的に裁量が非常に大きいことがまず指摘できる<sup>18</sup>。

次に、中国では、高級中学を卒業するにあたり、上述の教育課程の履修に加え、「会考」の受験とそれに合格することが必要とされる場合がある。この「会考」とは、「必修課程」について規定単位を修得した生徒を対象とし、各科目の基礎的内容の習得状況を確認する統一試験であり、全試験科目で合格することが高級中学卒業資格取得の主たる要件となっている<sup>19</sup>。この「会考」に関する規則は省や直轄市ごとに異なり、そもそも「会考」を実施していない場合もあるが、例えば北京市では「国語」、「数学」、「外国語」、「政治」、「物理」、「化学」、「生物」、「歴史」、「地理」の9科目について市統一の「会考」を実施している。また、これらは同じ時期に試験が実施されるのではなく、北京市の場合、高級中学一学年の生徒については「会考」は実施されず、二学年の一学期に「歴史」、「地理」、「物理」、「化学」、二学期には「思想政治」、「生物」の試験を実施し、三学年の一学期に「語文」、「数学」、「英語」について「会考」が実施される<sup>20</sup>。つまり、実質的な卒業は先に見た卒業必要単位数の144単位修得と北京市で統一的に実施される「会考」の全科目合格が必要条件となるのである。

## IBとAPの教育課程上の位置づけ

中国の高級中学を卒業するには、規定された教育課程の履修に加え、地方によっては「会考」の合格が必要であることを前提として、「国際部」におけるIBとAPの教育課程上の位置づけをみてみよう。まず、IBでは生徒は二年間かけて多様な科目をバランスよく履修しなくてはならないが、中国の高級中学は三年制である。そのため、高級中学の一年目はIBを履修するための重要な準備期間として位置づけられ、各校は英語に重点を置いた独自の教育課程を設けている。

IBには多様な科目がバランスよく配置されている点が特徴的であり、そのほとんどの科目で英語を用いた授業が行われる。また、試験内容は主に論述式の筆記試験であるため、生徒にとって負担の大きいものであることは確かであり、したがって「生徒がIB以外に中国の教育課程を全て履修する余裕はない」<sup>21</sup>という。ただし、IBを履修することでこそ、知識に偏らない総合的な力を獲得でき、そのディプロマは多くの国の高等教育機関の入学資格としての性格も有するため<sup>22</sup>、結果的に留学先の

選択肢が広がることになる。ただし、必然的に、中国高級中学の「必修課程」は完全には履修できず、そのため「会考」も受験することが困難となる。「例外」が散見される現在の中国において、「必修課程」を履修せずに中国の高級中学の卒業資格を得ることが100%ないとは言い切れないとしても、王が「教育とは特定の文化的基礎の上に成り立ち、文化の伝承であり」<sup>23</sup>、また謝が「国際教育プログラムを行う際は国家の教育課程と並行して行うべきである」と指摘している<sup>24</sup>ことから、「会考」の受験及び合格することなしに卒業資格を得ることはきわめて困難であると考えられる。

一方、APの特徴は、多様な30科目以上のなかから高校が開設科目を選択し、生徒もそこから自由に科目を選択履修できる点にあり、制度的には1科目のみの履修でも可能である。この点は多様な科目内容のバランスを重視するIBの場合とは大きく異なっており、そのためAPプログラムの履修負担はIBよりも小さいと指摘されることになる<sup>25</sup>。現実的には、アメリカの大学進学を希望する生徒の多くが理系であるので、実際に提供されるのは、「物理」や「化学」等の理系科目である<sup>26</sup>。これらの科目を履修して統一試験を受け、好成績を収めることによって、アメリカの大学に進学していく。

既述のとおり、現在の高級中学の教育課程には、学校が独自に設定できる「学校課程」が含まれている。APは、その「学校課程」として位置づけられ、生徒はAP科目を「必修課程」と並行して履修することが可能となり、したがって「会考」も受験でき、中国の高級中学卒業資格も得ることができるのである<sup>27</sup>。それによって、中国国内の大学進学という選択肢も卒業後の進路の一つとして確保できることになる。

APを導入する「国際部」が多い背景には、当然アメリカ高等教育の研究水準の高さを理由として、アメリカ留学希望者が多く存在していることも挙げられるが<sup>28</sup>、履修科目数や時間数について制限が設けられておらず、その利便性から中国の高級中学では最も受け入れやすいものだと判断されるからである<sup>29</sup>。中国の教育課程を履修しつつ、効率的に留学の準備を行うことが可能となるのがAPであるといえよう。

## おわりに

中国の「国際部」では、生徒の円滑な留学を促すためにIBやAPを主に導入しているが、プログラムの性格上、前者は中国の教育課程との共存が困難であるが、後者は可能である。確かに、こうした点において、「国際部」にとっては後者の方が実践しやすく、生徒にとっても効率的に履修できるため、留学自体を目的とすれば有効であると言えるだろう。しかし、中等教育としての「幅の広さ」や効果的な「教育接続」という観点から、両プログラムに関して検討することも必要だろう。現在、留学熱が高まっている中国では、本稿で焦点を当てたIBやAPのみならず、他にも多様な海外の教育プログラムが導入されている。複数のプログラムを実践する「国際部」もみられ、留学に至るまでの過程が多様化してきている。こうした状況のなか、今後「国際部」はいかなる目的でどのプログラムを導入

することを選択していくのだろうか。今後も注目していきたい。

- <sup>1</sup> OECD. (2015). *Education at a Glance 2015 : OECD Indicators*, OECD Publishing, p. 352.
- <sup>2</sup> *Ibid*, p. 352.
- <sup>3</sup> *Ibid*, p. 356.
- <sup>4</sup> International Students in the United States (<http://www.iie.org/Services/Project-Atlas/United-States/International-Students-In-US#.V47ZFvmyNBc>, 2016年7月25日閲覧)
- <sup>5</sup> 「重点中学争弁” 出国班” 引熱議」『中国教育報』(2011年4月2日付。)
- <sup>6</sup> Li, W., & Li, Y. (2010). An analysis on social and cultural background of the resistance for China's education reform and academic pressure. *International Education Studies*, 3(3), 211-215.
- <sup>7</sup> Austin, L., & Shen, L. (2016). Factors Influencing Chinese Students' decisions to Study in the United States. *Journal of International Students*, 6(3), 727.
- <sup>8</sup> International Enrollments at U.S. Colleges Grow but Still Rely on China. *The Chronicle of Higher Education*, November 18, 2011. China Props Up Foreign Students' Number in U. S. *The Chronicle of Higher Education*, November 19, 2010.
- <sup>9</sup> 「放棄高考選択留学高中生越来越多」『中国教育報』(2010年7月28日付。)
- <sup>10</sup> IIE Releases Open Doors 2015 Data (<http://www.iie.org/Who-We-Are/News-and-Events/Press-Center/Press-Releases/2015/2015-11-16-Open-Doors-Data#.V47cHPmyNBc>, 2016年7月25日閲覧)
- <sup>11</sup> 翁燕文「全球化背景下的國際高中課程述評—以IB課程、AP課程為例」『宁波教育学院學報』第4期、2008年、30—33頁。
- <sup>12</sup> 吉田孝「國際バカロレア・カリキュラムの概要」『國際バカロレア—世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店、2007年、22 - 30頁。
- <sup>13</sup> 徐士強・高光「普通高中面向境内学生開設國際課程的現狀、問題與建議—以上海為例」『教育發展研究』2012年第6期、12—13頁。
- <sup>14</sup> Setting an AP Credit and Placement Policy (<https://aphighered.collegeboard.org/setting-credit-placement-policy>, 2016年7月31日閲覧)
- <sup>15</sup> 付宜紅(編)『普通高中課程建設与管理』北京師範大学出版社、2010年、277頁。
- <sup>16</sup> 魏国棟・吕達(編)『普通高中新課程解析』人民教育出版社、2004年、89頁。
- <sup>17</sup> 小野寺香「中国の高級中学における國際化の理念と実態—國際部の制度特質に着目して—」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第5巻、2015年、99頁。
- <sup>18</sup> 付宜紅(編)『普通高中課程建設与管理』北京師範大学出版社、2010年、3頁。
- <sup>19</sup> 「關於普通高新课程会考制度改革的意見」(北京教育考試院 <<http://www.bjeea.cn/html/hk/hkzc/2010/0907/13085.html> >2016年7月20日閲覧)
- <sup>20</sup> 同上。
- <sup>21</sup> 小野寺香、前掲論文「中国の高級中学における國際化の理念と実態—國際部の制度特質に着目して—」、100頁。
- <sup>22</sup> 徐輝「國際学校和國際學校課程述評」『教育理論与实践』2001年、43頁。
- <sup>23</sup> 王軍「世界跨文化教育理論流派綜術」『民族教育研究』第3期、1999年、66—73頁。
- <sup>24</sup> 謝艷珍「中外合作高中教育双軌制運行模式的可行性研究」『遼寧教育研究』第4期、2005年、20—21頁。
- <sup>25</sup> 唐盛昌・李英(編)『高中国際課程的实践与研究』上海教育出版社、2011年、64頁。
- <sup>26</sup> 小野寺香、前掲論文「中国の高級中学における國際化の理念と実態—國際部の制度特質に着目して—」、100頁。
- <sup>27</sup> 同上。
- <sup>28</sup> 唐盛昌・李英(編)、前掲『高中国際課程的实践与研究』、65頁。
- <sup>29</sup> 小野寺香、前掲論文「中国の高級中学における國際化の理念と実態—國際部の制度特質に着目して—」、100頁。

# ミャンマーの病院でのインターンシップ

—現地で学んだ国際協力に大切な心—

## Internship Activity at Hospital in Myanmar:

### The Lesson I Learned;

### Important Mind for International Cooperation

佐賀大学経済学部 山口 諒真

YAMAGUCHI Ryoma

(Faculty of Economics, Department of Economics, Saga University)

キーワード：国際協力、ミャンマー、海外インターン

#### 〇はじめに

私は文部科学省が官民協同で実施している、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」の1期生として、東南アジアのミャンマーという国へ2014年8月から2015年2月にかけてインターンシップ留学をさせていただきました。この期間の経験は私にとってかけがえのないものになりました。お世話になったトビタテ！留学 JAPAN の職員の皆様、佐賀大学の教職員の皆様、インターン先の職員の皆様、その他関係者の皆様には心から御礼を伝えたいです。本当に有難うございました。

#### 〇トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムとは

最初に「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」という留学奨学金制度を紹介させて下さい。トビタテ！留学 JAPAN は文部科学省が民間企業と官民協同で取り組む留学促進キャンペーンで東京オリンピック・パラリンピック競技大会が実施される2020年までに大学生の海外留学の倍増を目標としています<sup>1</sup>。

この留学制度は留学を志す学生にとって非常に魅力的なのでその特徴を3つ挙げていきます。1つ

<sup>1</sup> 制度の実施は日本学生支援機構が行っている。

目は、「返還不要の充実した奨学金」です。海外渡航費や月々の活動費などプロジェクト奨励金として年間最大300万円の返還不要の奨学金が支給されます。この奨学金のおかげで金銭的な問題が理由で留学を諦める必要がなくなります。希望する学生には等しく留学のチャンスが与えられています。私にとっても金銭的なストレスなくインターンシップ留学ができたことは、現地での活動に集中することに繋がり非常に濃い留学期間を過ごすことができました。また海外の大学・大学院等への留学以外にも、私のような海外でのインターンシップやボランティア活動など、従来の枠にはまらない独自の留学もこの奨学金制度の支援対象になることも大きな特徴です。なお、この奨学金の財源は各分野で活躍されている方々や民間企業からの御支援や御寄附などにより成り立っています。

2つ目の魅力は、「留学計画と向き合う事前・事後研修」です。トビタテ！留学 JAPAN の派遣留学生に選抜された学生は留学前に国内で事前研修を受けることとなります。先ほど述べたようにこのプログラムの派遣留学生は一人ひとりが独自の留学計画で留学します。事前研修では各自の留学計画をより充実した留学になるようブラッシュアップをおこないます。研修中は社会で活躍しているグローバルリーダーや派遣留学生の同期とお互いアドバイスを行ない、自分の内面と向き合うワークショップを通じて留学への心構えをつくります。留学後は事後研修を通じて、留学中の経験を自分の中で整理します。私は事前研修では周りの学生のレベルの高さに驚き、自分自身の未熟さを痛感しました。この時の感情は筆舌に尽くしがたいですが、悔しさや憧れが入り混じっていたように思います。この悔しさや憧れは留学中に自分を鼓舞してくれました。留学を終えてからの事後研修では、留学前の自分と留学後の自分の変化に気づき、それを言語化できるようになったことで、留学での成長を強く実感しました。

3つ目の魅力は「トビタテコミュニティ」です。トビタテ！留学 JAPAN には全国47都道府県から様々な分野の学生が選抜されています。それぞれの学生の専門分野や興味関心も多様で、一人ひとりがキラキラと夢や目標を語り応援し合えるコミュニティがあります。トビタテコミュニティでは、人生を変えるような出会いやきっかけがたくさん生まれています。上記に述べた、充実した奨学金や研修も魅力的ですが、このコミュニティでの仲間との出会いが私にとって最も貴重なものになりました。トビタテ事務局の職員の方々も人生を捧げてこのコミュニティ形成に並々ならぬ愛情を注いで下さっています。留学を終えて帰国した学生もエバンジェリスト活動として留学の魅力発信や、コミュニティ活性化を積極的に行なっています。私自身もこのコミュニティの発展に貢献したいと思っています。

## ○マンマーヘインターン留学を決めたきっかけ

私は4歳の頃からレスリングをしていました。レスリングが大好きでオリンピックに出場したいという夢もありましたが、なかなか強くなれませんでした。大きな大会に出場しても、あと一歩という

ところで試合に勝てず、中学を卒業するタイミングでレスリングでの夢を諦めてしまいました。勉強もそれほど得意ではなく、スポーツでも挫折して、もやもやとした気持ちで高校生活を送っていました。そんな時に、たまたまテレビで観た情熱大陸という番組で、ミャンマーで医療活動を行なっている吉岡秀人医師が紹介されていました。ミャンマーで目の前の患者さん一人ひとりと向き合い懸命に治療を行う姿を見た時に、自分も一生に一回くらいはこのような現場に行き、この様な人たちと働いてみたいと強く思ったことが海外インターン留学を希望するきっかけになりました。

## ○現地での日常生活

多くの読者の方にとってミャンマーは身近な国ではないと思いますので、現地での日常生活の一部を紹介させていただきます。ミャンマーは熱帯気候で夏季、雨季、乾季の3つがあります。私が滞在した雨季の時期には、毎日のようにスコールが降り、干していた洗濯物を急いで取り入れていたことを思い出します。乾季の時期は気温もそれほど高くなく非常に過ごしやすいため観光にはおすすめのタイミングです。観光と言えば、ミャンマーにはたくさんのパゴダ（寺院）があります。全人口の約8割程度が仏教を信仰しているミャンマーでは至る所にパゴダが存在し、僧侶や仏教徒の方がお祈りしている姿を見かけます。タクシーの中にパゴダの置物があったり、信号待ちの時間に手を合わせて拝んでいたりと日常生活の中に仏教が溶け込んでいるように感じました。ミャンマーにはミャンマー料理というものがあります。ミャンマー料理は米が主菜で、副菜のカレーなどと一緒に食べる人が多いです。外食することも多く、屋台などではシャンカウスエーやモヒンガーなどの麺料理もよく食べられていました。麺類は多くの日本人の口にも合うのでぜひミャンマーに行かれる際には食べてみて下さい。



写真1：ミャンマーでも有名なシュエダゴンパゴダ

## ○現地での活動

現地の病院でのインターンシップを開始するにあたって、周りの医療従事者の方が手術などで患者さんを助けていく中で、私は医者でもないし看護師でもないの、人の命を救えない、こんな自分に何ができるのだろうかと悩んでいました。そんな時に私はミャンマーの入院患者さんが抱える2つの課題に気づきました。1つ目は、ミャンマーには医療保険の制度がなく、患者さんは入院中に働いてお金を稼ぐことができないためお金に不自由すること。2つ目は、患者さんは入院中ベッドで寝ている時間が多く、子供たちは学校に通うことができません。日本のようにテレビゲームなどの娯楽も少なく、入院が長引くにつれ患者さんの笑顔が失われていくことに気づきました。

そこで私は2つの解決方法を考えました。まず1つ目の解決策は、「入院ベッドを工房に」というプログラムです。患者さん自身が入院しているベッドの上でお金を稼げるような仕組みを作りたいと思い、ミャンマーで豊富な天然石を利用してアクセサリーをつかって販売し、患者さんが入院中にお金を稼げる仕組みを作ることになりました。

2つ目の解決策は、「入院ベッドを教室に」というIT教育プログラムです。ミャンマーではホワイトカラーの仕事が増えてきており、ワード、エクセル、パワーポイント、インターネットが使えることで、子どもたちに将来の仕事が見つかりやすくなります。また、ミャンマー国内では感染症が多いという現状を知ったので、エイズやB型肝炎、C型肝炎の正しい保健知識が学べる映像授業を届けたいと思いました。こちらのプロジェクトは途上国に映像教育を届ける活動を行なっているNPO団体とコラボレーションさせていただき実施しました。

プロジェクト実施に必要な資金は、クラウドファンディングで調達しました。最終的にたくさんの方からご支援いただいて、はじめはたった一人の思いつき、たった一人の想いで踏み出した一歩でしたが、最後にはみんなの夢、みんなの目標になって、このプロジェクトを実施することができました。たくさんの方々に応援、ご支援いただいたことを感謝しております。本当に有難うございました。



写真2：アクセサリープロジェクトの様子

## ○自分のエゴと向き合った日々

上記のプロジェクトを進めていく一方で、「これって本当に患者さんのためだけにやっているのだろうか？もしかしたら、自分自身が人から褒められたい、人に認められたい、そのような思いがあるのではないか？」と悩むことがありました。でも同時に、もちろん、ミャンマーの貧しい患者さんや、本当に困っている人達を助けたいという思いもありました。ただ、実際にミャンマーに行くことになった時には、ボランティアの気持ちだけでは行けなかったと思っています。ミャンマーに行ってチャレンジしたい、自分に何か凄いことができるのではないかというエゴの部分もあったと自覚しています。それが、最終的には自分の背中を押すかたちになり休学や留学に踏み切ることができました。その自分のエゴを現地で活動しながら気づかされました。クラウドファンディングをしてお金を集めて、プロジェクトを実施しても、「これって、人から褒められるからやっているのではないか？」と自分のエゴに悩みました。

その悩みの答えは入院患者さんから教えてもらうことになりました。日にちまで覚えています。帰国2週間前の2015年2月17日のお昼頃でした。自分がこのプロジェクトをやっている間に意味があるのかなと思いながら5ヵ月半活動を続けた中で、まさにこの日、患者さんたちがすごく楽しそうに心の底からの笑顔で「チェズーティンパーデー」（ミャンマー語でありがとう）と声をかけてくれながら、ベッドの上ビーズアクセサリ製作でお金を稼いでいる姿を見たときに、少しでも患者さんのためになっていて、自分もやりたいと思うのであれば、エゴと善意の二つがあっていいのだと思うことができました。当初、エゴは悪いものだと思って、善意だけで頑張らないといけないと思っていましたが、善意だけでは頑張りに続けることは難しいと感じています。人のためになることで、かつ、自分のやりたいことであれば、そのエゴのエネルギーすらもポジティブな方向に発散されると考えています。「エゴ」と「善意」の二つが一つになったという感覚が、ミャンマーでの留学中に得た大きな気づきの一つです。

## ○おわりに：一歩を踏み出すことの大切さ

最後に、ヤンゴン国際マラソンでのエピソードを紹介させてください。私は毎週月曜日、ミャンマーの視覚障がい者の方が通う盲学校で職業訓練サポートをさせていただいていました。その施設で出会った、タートゥーという名前の男の子からこう言われました。「僕、マラソンを走ってみたい！」

しかし、彼は、今までの人生で400メートルを2回だけしか走ったことがないと言っていました。ミャンマーでは目の不自由な方が自由に運動できる環境が少ないのですが、彼自身が挑戦したいという意思があったので、チャレンジを応援させていただくことにしました。

少しずつ練習を始め、マラソン大会へ応募しました。すると出場不可能だと言われました。ミャンマーでは前例がないし、危険だからやめた方がいいという判断でした。でも彼は走ってみたいと本気



でした。私たちは諦めることなく練習を続けながら、視覚障がい者の方にあん摩の指導をしている方やミャンマー人スタッフの協力を得て、マラソン協会と出場の交渉を続けてもらいました。そして、最終的に出場を許可していただきました。私たちだけでは、出場することすらできませんでした。一歩を踏み出すことで周りも背中を押してくれるようになったのです。



写真3：ヤンゴン国際マラソンの様子

マラソン大会当日、私たちは緊張していました。練習でもハーフマラソン 21km という距離は一度も走ったことがありませんでした。正直、私は 21km を制限時間内に走り終えることは厳しいと考えていました。気持ちを高めて気合いで完走するために当日の朝、タートゥーに新しいランニングシューズをプレゼントしました（今まで上履きのような靴しか持っていなかったの）。それでテンションも上がり「絶対に完走するぞー！」と緊張もほぐれました。マラソンがスタートして走っていると、途中私たちを見て笑う人もいました。伴走用のロープを持って走っているのだから手は繋いでいたように見えたのかもしれませんが。でもそれ以上に「チョーザーバー！」（ミャンマー語で「頑張っ！」の意味）と声をかけて下さったり、一緒に横で走ってくれる心優しい方も多くいました。一歩を踏み出し続けるタートゥーに声援が集まるようになりました。途中しんどくなり立ち止まりそうになることもありましたが、タートゥーは最後まで諦めることなく走り続け、制限時間内に 21 キロのハーフマラソンを完走しました。



写真4：ゴールをしたときには多くの方からの声援があった

21kmを走れと言われると先が見えず誰もが途方に暮れてしまいます。しかし、途中にある次の1km、次の1kmと目の前にある目標に向かって、小さくてもいいから一步を踏み出し続ける。そうすると少しずつ、でも確実にゴールに近づいていきます。「本当に大切なことは、一步を踏み出し続けること。」タートウーの伴走をしながら、一步でもいいから踏み出し続けることが大切なのだということを教わりました。

留学や休学への一步を踏み出すことは、恐れや不安があるかもしれません。私自身も当初は休学や留学に対して不安がありました。今でも自分自身に揺るぎない自信があるわけでもなく、何か凄いことを成し遂げたというわけでもありません。小さい目標を一つ一つ積み重ねられたという実感が自分の中にあります。「あ、今日はこれできた。」とか、「一年後これもできるかもしれない。」と、小さなことでもいいからチャレンジしてみようという想いが、「あ、できた！」「自分にでもできるかも！」という一步を踏み出す勇気に繋がると感じています。

たった一人でも、お読みくださった方の一步を踏み出すきっかけになれたとしたらそれ以上に嬉しいことはありません。最後までお読みくださりありがとうございました

次号予告  
ウェブマガジン『留学交流』9月号  
特集「外国人留学生の宿舎支援と活用」  
宿舎における外国人留学生と日本人学生の交流、宿舎探し（予定）



ウェブマガジン『留学交流』 8月号

Vol. 65

平成28年8月10日発行

編集 独立行政法人日本学生支援機構

（編集部）留学情報課

東京都江東区青海 2-2-1（〒135-8630）

電話 (03)5520-6111

FAX (03)5520-6121

Eメールアドレス [ij@jasso.go.jp](mailto:ij@jasso.go.jp)

## 編集後記

本号では、「海外留学することの意義」と題し、留学体験のインパクトと成果について考察し、事例として、短期海外語学研修の効果、海外体験学習におけるルーブリックの活用、大学の国際化推進事例を取り上げております。

また、海外の教育事情では、中国の高校生にとっての海外留学、海外留学レポートでは、チャンマーでのインターンシップ体験をご紹介します。

本号が、日本人の海外留学に携わるみなさまの参考となることを願っています。

本誌へのご意見、ご感想は、上記Eメールアドレスまでお願いいたします。 （編集部）

## Web Magazine “Ryugakukoryu”(Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.  
(Issue date: 10th of each month)